HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学新渡戸カレッジ ： 特別教育プログラム ： ボランティア ： 2015年度報告書
Author(s)	木村, 純; 川畑, 智子
Description	編集 ： 木村 純（北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部 特任教授); 川畑 智子（北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部 特任准教授）協力 ： 北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部; 北海道大学新渡戸カレッジオフィス
Relation	文部科学省・経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援プログラム
Issue Date	2016-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70097
Type	report
File Information	volunteer_2015.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学　新渡戸カレッジ
特別教育プログラム

ボランティア

2015 年度 報告書

文部科学省 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援プログラム

北海道大学新渡戸カレッジ
2016 年 4 月

北海道大学　新渡戸カレッジ
特別教育プログラム

ボランティア

２０１５年度　報告書

文部科学省　経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援プログラム

北海道大学新渡戸カレッジ

２０１６年４月

編集
木村　　純　　（北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部　特任教授）
川畑　智子　　（北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部　特任准教授）

協力　北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部
　　北海道大学新渡戸カレッジオフィス

目次

はじめに 1
１．授業概要 5
２．年間行事 6
３．履修状況 7
４．集計結果 8
⑴全体の集計結果 8
⑵ 取得単位ごとの集計結果 10
１．２単位取得者の特徴 10
２．１単位取得者の特徴 11
５．学生が参加したボランティアの種類 14
６．活動内容 15
７．学んだこと、気が付いたこと 17
８．ボランティア参加の動機や理由 19
９．教員への要望 22
10. 参加先からのコメント 22
学生たちによるボランティア体験報告 25
ニュージーランド Atiu Creek Regional Park での自然保護活動 27
ドイツの環境保護ボランティア活動報告書 29
開拓の村でのボランティアを通して学んだこと 31
北海道地域魅力市～過疎地域から学んだこと～ 33
フランスのある農場での生活 35
円山動物園ガイドボランティア活動報告書 37
こども領事と学んだ３か月 39
北大マルシェボランティア体験記 41
犬猫保護活動ボランティア体験記 43
「見えなかったのか？見ていなかったのか？」 45
ネパールでの冒険で得た学び 47
アンケートの結果 51
１．事前アンケート（履修参加登録時） 53
事前アンケートの結果の概要 53
事前アンケートの集計結果 54
２．中間アンケート 57
中間アンケートの結果の概要 58
中間アンケートの集計結果 59
３．事後アンケート 62
事後アンケートの結果の概要 62
事後アンケートの集計結果 63

資料 67
１．体験報告会の模様 69
２．オリエンテーションの模様 72
３．ふりかえり会の模様 73
第１回　ふりかえり会 73
第２回　ふりかえり会 73
第３回　ふりかえり会 74
４．ワークショップの模様 75
５．まとめの講義 75
６．その他 76
７．過去のニュースレター記事 77
編集後記 79

はじめに

2015 年度　新渡戸カレッジ　特別教育プログラム「ボランティア」を終えて

高等教育推進機構　特任教授　木村　純

新渡戸カレッジ特別教育プログラムとして、ボランティア活動体験を含む「ボランティア」の授業に昨年度に引き続き取り組みました。昨年度、この授業を始めるにあたって、私たちは、授業のねらいを次のように考え、確認しました。

ボランティアは、第１に、その活動を通して、学生たちが「市民」として成長し、民主的で平和な社会を実現するうえで大切な活動であり、活動の経験を通して、学生たちが学んでいることが社会で生起している現実の問題の解決にいかに役に立つのか、またそのために何を学ばなければいけないかを真摯に考える機会となること。第２に、ボランティアは国際的にも、平和を実現し，貧困をなくし，教育制度を整え、国境を超えた相互理解をすすめる上で大切な活動であることについて、自分自身の活動を通して考え、気づく機会になること。そのために、ボランティアの理念と意義、方法を講義や討論を通じて学び，実際に活動を体験し、とくにその活動の体験のなかで、直面せざるを得なかったことについて自分自身がどのように対応できたのか、またできなかったことについて振り返えることを通して学ぶということでした。

講義は、昨年度と同様に、（１）ボランティアとは何か、（２）ボランティアにはどのような活動があるか、（３）ボランティアを始める際に大切なことについて、行いました。講義でとくに強調したことは、ボランティアの自発性、主体性ということであり、「いわれなくてもする、いわれてもしない」（草地賢一「市民とボランティア」酒井道雄編『神戸発阪神大震災以後』岩波書店，1995 年）ということや活動から生じるジレンマや悩みを自ら積極的に引き受けることによって人間として成長できる活動であること、「とにかく一度やってみること」が大切で「やる以上は責任をもつこと」が求められるが「やめて、次に進むことも大切である」こと、活動することで直面した「できごとの意味を考える」ことが大切であることをとくに強調しました。

ボランティアの「自発性」とは「自らが率先して行動するということ，そして自分の意思で行う」ということであるが，「まったく自分の自由意思で行う行動というのは、厳密に考えると人間にはほとんどない」（内海成治「ボランティアとは何かー教育の視点からー」、内海・中村泰秀編『新ボランティア学のすすめー支援する/されるフィールドで何を

学ぶか』昭和堂、2014 年)と指摘されていることも紹介しながら、自らの「主体性」「自発性」についても自明の前提としないことも大切なことを丁寧に説明しました。

したがって、活動を始めるに当たっては、活動先のリストにできるだけ多くの活動を上げ、学生自身の希望と意志によって活動先を決めるということを昨年度に引き続き重視しました。また、活動を終えて、報告書を作成し、報告会で発表するまでに、教員との対話を通じて、ボランティア活動を体験した学生ひとりひとりが自らの活動をふりかえることにより、自分自身の気づきを明らかにすることや体験を通じて何を学んだかを確認することを大切にしました。

ボランティア活動の体験先については、履修者の意向を踏まえて、社会教育施設、社会福祉施設、子どもの学習支援活動等を紹介しました。今年度は昨年度よりも海外でのボランティア活動を希望する学生が多かったこと（９名中４名）が特徴的なことでした。また、この授業を受講する以前から、自らボランティア活動に取り組む学生も２名いました。円山動物園や動物愛護の活動をしている２名の学生です。この２人の学生の将来の進路にもつながっていくようなボランティアとしての真摯な取組がほかの学生たちのボランティアについてのより深い学びを生み出したと考えています。

このようにして、2015 年度前期・後期を通じて、９名の学生が履修完了に至りました。昨年度には 22 名が体験を行ったことからすると大きく減少しています。学生の「主体性」、「自発性」を尊重した結果だと考えていますが、より多くの受入れ先の開拓を行って、受入れ先との信頼関係を構築しながら学生が選択できるメニューを増やしていくこと、そのことを基礎に学生が自ら取り組みたいことに気づくような丁寧な対話をすすめていくことが課題とされます。

本報告書の 17 頁以降に示されているように学生たちは多様な学びを行っています。第１に、子どもたちを対象にボランティア活動を行った学生の多くは子どもたちと接することが予想以上に難しいことに気づいたことを以下のように述べています。「子どもの抱える背景や新しい考えにふれ、世の中には私の持つ価値観と違う価値観があることに改めて気づかされました。将来、歯科医師となった際、自分の先入観にのみ頼らず、人の意見を聞こうとする態度に活かせると思います」、「子どものやる気の向けさせ方、継続させるのが大変だった」。第２には、博物館・動物園のボランティアを体験した学生は、それぞれの施設の使命に応じて北海道の歴史や動物についての深い知識が求められているだけではなく、「他のボランティアの方やお客様との触れ合いを通して、他人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢が身に付きました」、「動物と接する時間を長くするために始めたボランティアだが、一番学んだのは動物のことではなく人とのかかわり方であった」等と述べているように、コミュニケーションの大切さに気づいたことです。第３に、ボランティアを共に行った仲間たちのモチベーションの違いや語学力なども要因となって、ほかの仲間たちとなじむことができないメンバーと一緒に活動していくために自分自身は

どのように行動するべきか悩む学生が少なくないことです。こうした悩みに誠実に向き合うことを通じて彼らが成長していくことも教師として感じることができるのです。

また、学生たちのボランティア活動は受け入れ先から感謝され、学生への評価も高く、とくに、先輩ボランティアの方たちからは歓迎され、学生と一緒に活動することを喜んでいただきました。報告会の報告や報告書についても指導の結果でもありますが、私たちの予想以上に学生たちの報告はよく整理されたもので、ボランティア活動で学んだことがよく伝わる報告が行われました。学生たちがボランティア活動の体験で得たことが大きかったことは、この授業終了後も履修を機会に始めたボランティア活動を継続している者が少なくないことが示しています。

２年目の授業において昨年度の経験を踏まえて発展させることができたこととして、報告会で、受け入れ先の施設・団体の方にも参加をお願いし、学生の活動体験についてご意見や助言をいただけるようにすることができたことです。北海道開拓の村や円山動物園のボランティアの方たちの参加していただき、励ましを受けることができました。また、１年目の受講学生が先輩として自分たちの体験を紹介してくれたことも重要な成果です。しかし、本学の学生ボランティア相談室と連携し、学生がボランティア活動について学んだ成果を共有することについては次年度の課題となりました。

学生を快く受け入れ、御指導いただいた施設・団体の皆様とはより連携も深まったと感じています。昨年度に引き続くご協力に心から感謝申し上げます。また、学内では渡日時ボランティアとしての受入れや海外ボランティアの紹介など多大なご支援をいただいた本学国際本部の皆様のご協力に対して御礼を述べたいと思います。

１．授業概要

新渡戸カレッジ特別教育プログラムにおける科目の位置づけ

授業科目	目標	単位	備考
留学支援英語	グローバルなコミュニケーションとしての英語力の育成	２	４単位以上
フィールド型演習	チームワーク力、リーダーシップの育成	２	２単位以上
多文化交流科目等、異文化理解促進科目	多文化状況の中での問題解決力の育成	２	２単位以上
国際交流科目 英語による学部専門科目 日本文化・社会に関する理解増進科目	グローバルなコミュニケーションツールとしての英語力の育成	２ １又は２ ２	４単位以上
新渡戸学 **ボランティア** インターンシップ	**世界の中での日本人としての自覚の涵養とキャリア形成**	**１又は２**	**２単位以上（新渡戸学１単位は必須）**
海外留学	グローバルなコミュニケーションツールとしての英語力の育成	１又は２	１単位以上
合計			15 単位

ボランティアは新渡戸カレッジ独自の科目である。

科目責任者	木村純　（北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部　特任教授）
学期・定員	通年・15 人
ボランティア	ボランティアは、地域社会で自己の追及すべき課題を明確にするとともに、責任をもって活動することの重要性を認識することを目的とする。単位数は、実習をする時間数により異なる。実習 30 時間以上で１単位、実習 60 時間以上で２単位とする。

（『新渡戸カレッジ　履修の手引き』より抜粋 ）

２．　年間行事

2015 年１学期

月	日	講義・事前事後研修　スケジュール
４	１０（金）	オリエンテーション　　１回目 渡日時留学生サポーター説明会
	１７（金）	講義１
	２４（金）	オリエンテーション　　２回目 先輩からの体験報告 渡日時留学生サポーター説明会
５	１（金）	講義１
	８（金）	講義２
	１５（金）	講義３
	２２（金）	個別面談
	２９（金）	個別面談
６	１２（金）	個別面談
	１９（金）	個別面談
	２６（金）	参加先の決定・通知
７	１０（金）	補講１
	１７（金）	補講２
７	２４（金）	補講３
	３１（金）	個別相談

2015 年２学期

月	日	講義・事前事後研修　スケジュール
９	２５（金）	体験報告会の事前打合せ
１０	２（金）	体験報告会１回目
	９（金）	ふりかえり会　１回目
	１６（金）	ワークショップ１ 個別相談
	２３（金）	個別相談
	３０（金）	個別相談
１１	６（金）	体験報告会の事前打合せ
	１３（金）	体験報告会２回目
	２０（金）	ふりかえり会　２回目
	２７（金）	ワークショップ２ 個別相談
１２	４（金）	参加先の決定・通知　開始
	１１（金）	個別相談
	１８（金）	個別相談
	２５（金）	体験報告会の事前打合せ

1	８（金）	体験報告会３回目
	２２（金）	ふりかえり会　３回目
2	５（金）	個別相談
	１２（金）	個別相談
	１９（金）	体験報告会の事前打合せ 個別相談
	２６（金）	体験報告会　　４回目
3	１８（金）	体験報告会　　５回目

３．履修状況

履修完了者数

年度	事前研修修了者	実習終了者	事後研修修了者	履修完了者数
2015 年度	15 名	10 名	9 名	9 名

※「欠席・連絡なし」6 名
※ 履修参加登録した 20 名のうち、「留学」「体調不良」「自己都合」により履修キャンセルをした 5 名は含まない。

表 1.　学生の基本情報

カレッジ学年	女性	男性	計
2015-1	2	0	2
2015-2	0	2	2
2014-1	2	1	3
2014-2	1	1	2
2013-1	0	0	0
2013-2	0	0	0
合計	5	4	9

表 2.　性別と学年

	学年			合計
性別	1 年生	2 年生	3 年生	
女子	2	2	1	5
男子	1	2	1	4
合計	3	4	2	9

表 3.　学部別

学部	人数
総合文系	0
総合理系	3
文学部	1
法学部	1
経済学部	1
医学部	0
歯学部	1
獣医学部	0
水産学部	0
理学部	0
薬学部	0
農学部	2
工学部	0
合　計	9

表 4.　取得単位数

取得単位数	人数
1 単位	5
2 単位	4
合　計	9

表 5.　取得単位数(学年ごとの人数)

学年	1 単位	2 単位	合計
1 年生	0	3	3
2 年生	3	1	4
3 年生	2	0	2
合　計	5	4	9

表 6.　活動内容別（「実習終了者」10 名中）

活動内容(重複あり)	延べ人数
子どもの学習支援	2
博物館ボランティア	2
まちづくり(イベント運営支援)	2
海外ボランティア	4
動物愛護	1
ホームレス支援	1

4．集計結果

(1)全体の集計結果

表 7.　ボランティア参加先の数

参加先の数	人数
1 か所	7
2 か所	3
合　計	10

※　「実習終了者」10 名の内訳

表 8.　主な活動期間

活動時期（重複あり）	延べ人数
１学期中　４～７月	10
夏休み中　８～９月	13
２学期中　10～11 月	5
冬休み中　12～１月	4
春休み中　２～３月	1

表 9.　活動期間の長さ

活動期間の長さ	人数
１カ月未満	2
１～２カ月未満	3
２～３ヵ月未満	1
３～４か月未満	1
４～５か月未満	1
５～６カ月未満	1
６カ月以上	1
合　計	10

※「活動期間」とは、体験実習の開始日から終了日までの期間である。

表 10.　活動した日数

活動日数（学生ごと）	人数
7 日間未満	2
7 日間～14 日間未満	5
14 日間～28 日間未満	3
合　計	10

表 11.　活動時間

活動時間（学生ごと）	人数
30 時間以上	6
60 時間以上	4
合　計	10

表 12.　主な活動地域（重複あり）

国内	延べ人数（6 名中）	海外	人数
札幌市内	7	ヨーロッパ	2
北海道内	1	東南アジア	1
道外	1	オセアニア	1
		合　計	4

(2) 取得単位ごとの集計結果

１．２単位取得者の特徴

２単位取得者は、履修完了者９名中４名で、男女それぞれ２名だった。４名中３名が海外ボランティア、１名が国内ボランティアに参加した。海外ボランティアの内容は、外来種の除去や植林(ニュージーランド)１名、農作業と農場環境の維持（フランス)１名、道路の整備(ドイツ)１名だった。国内では、円山動物園のボランティアガイド１名だった。４名中３人が１年生だった(表 13)。実習の総時間は、60 時間から 90 時間であり、平均すると 74.5 時間と所定の時間を超えていた。国内でボランティア活動をした１名は、７カ月かけて定期的にボランティア先に通って参加していた。海外でボランティア活動を行った３名は、夏季休業を利用して２～３週間かけて集中的にボランティアをしていた(表 17)。このうち、２名が、ＣＩＥＥ(国際教育交換協議会)の「海外短期ボランティア」プログラム、１名がＮＩＣＥ(日本国際ワークキャンプセンター)、１名が CEC JAPAN NETWORK という海外ボランティアプログラムを利用していた。国内で活動した１名は、以前からボランティア活動に関わっていたことから活動開始時期が早く、活動時間を十分にとることができたと考えられる。海外ボランティアに参加した３名中、１名は、昨年度も海外ボランティアに参加したリピーターだった。

表 13. 性別と学年

性別	１年	２年	３年	合計
男子	1	1	0	2
女子	2	0	0	2
合計	3	1	0	4

表 14. 性別とカレッジ学年

性別	2013-1	2014-1	2014-2	2015-1	2015-2	合計
男子	0	1	0	0	1	2
女子	0	0	0	2	0	2
合計	0	1	0	2	1	4

表 15. 学生別

性別	学年	カレッジ学年	所属	時間	日数	期間※（月数）	単位
男	1	2014-1	総合理系	70	20	7	2
女	1	2015-1	総合理系	77	11	2	2
男	2	2015-2	法学部	91	13	1	2
女	1	2015-1	総合理系	60	10	2	2

※「期間」は、実習開始から終了までにかかった期間である。

表 16. 活動内容別

活動内容	人数
子どもの学習支援	0
博物館ボランティア	1
まちづくり	0
動物愛護	0
海外ボランティア(環境保護)	3
合　計	4

表 17. 活動が集中した時期（4 名中）

時期(重複あり)	延べ人数
４月～６月	1
７月～9 月	4
10 月～12 月	0
1 月～3 月	0

２． １単位取得者の特徴

１単位取得者は、９名中５名だった。５名中３名が２年生、２名が３年生で、１年生はいなかった。５名中３名が女子、２名が男子だった (表 18)。分野は農学部２名で経済学部、歯学部、文学部がそれぞれ１名だった。 (表 20)。活動が開始された時期を学期ごとにみてみると、１学期３名、２学期３名 (表 22)で、１名を除いて、学期中に実習活動を終えていた。 (表 23)。実習期間の長さは、１カ月間～６カ月間で、６名全員が６カ月以内に終了していた(表 20)。活動が集中した月をみると、８月～９月の夏期休業中が４名で最も多く、次いで多かったのは１月～３月の３名だった(表 24)。実習時間は、６名中、50 時間以上が２名いた。

表 18.　性別と学年

性別	１年	２年	３年	合計
男子	0	1	1	2
女子	0	2	1	4
合計	0	3	2	5

表 19.　性別とカレッジ学年

性別	2013-1	2014-1	2014-2	2015-1	2015-2	合計
男子	0	0	1	0	1	2
女子	0	2	1	0	0	3
合計	0	2	2	0	1	5

表 20.　学生別

性別	学年	カレッジ学年	所属	時間	日数	期間※（月数）	単位
男	2	2015-2	文学部	30	5	1	1
男	3	2014-2	農学部	54	16	5	1
女	2	2014-1	農学部	31.7	7	3	1
女	3	2014-2	歯学部	33	10	4	1
女	2	2014-1	経済学部	35	5	1	1

※「期間」は、実習開始から終了までにかかった期間である。

表 21.　活動内容別　（５名中）

活動内容(重複あり)	延べ人数
子どもの学習支援	2
博物館ボランティア	1
まちづくり(ホーレス支援、イベント運営支援)	2
動物愛護	1
海外ボランティア（被災者支援）	1

表 22. 活動が開始された時期(学期ごと)

開始時期	人数
１学期中(４月～９月)	2
２学期中(10 月～２月)	3
合　計	5

表 23. 実習の終了時期

終了時期	人数
１学期中	2
２学期中	3
合　計	5

表 24. 活動が集中した時期（6 名中）

時期(重複あり)	延べ人数
４月～ ６月	1
７月～ ９月	3
10 月～12 月	1
１月～ ３月	3

考察

２単位取得者４名のうち、夏期休業を利用して短期集中型の海外ボランティアを行った人が３人、すでに自分で探したボランティア活動を行っていた人が１人いた。海外ボランティアでは、業者が提供しているまとまったプログラムが用意されていたことや、すでにボランティア活動をしていたことが有利に働いたことがわかる。これについては、昨年同様、夏季休業を有効に利用できたか否か、実習認定期間からすぐに開始できる準備ができていたか否かが単位数の差に影響を与えたと考えられる。一方、１単位取得者については、昨年は１学期から２学期にかけて、ゆっくりと展開されていたが、今年度は、昨年度に比べ、活動のペースは、５名中５名全員が実習を開始した学期中に実習を終了していた。また、所定の時間数を大幅に超えた者の数は、昨年度は、22 名中９名であったのに対し、今年度は５名中１名であった。このことから、昨年度とは異なり、学生たちが単位取得を意識して計画的にボランティアに参加していたと考えられる。

今回のボランティア体験実習をきっかけに活動をそのまま継続した学生は、現在のところ見られない。また、体験実習をする以前からボランティア活動に参加していた学生で現在も継続している学生は１名のみである。その理由は、今年度は、昨年とは異なり１年生が皆無であり、２年生、３年生の場合は、専門分野の学業、就職活動やインターンシップなど他にしなければならない重要な活動を控えているためであると考えられる。その意味において、ボランティア科目は、比較的時間的余裕のある１年生の段階で履修することが望ましいと考えられる。

ボランティア実習先が見つからなかった学生の特徴として、自らの専門分野やキャリア形成に適したボランティア活動を希望する学生や動物に接触するボランティア活動を希望するなど、活動内容にこだわりがある学生が散見された。今後は、まずは全員で同じボラ

ンティアに参加してみるという動機づけを行ってから、個別に対応していくことが望ましいと考えられる。

５． 学生が参加したボランティアの種類

表 25.　学生が参加したボランティア活動の種類（「実習終了者」1 名を含む 10 名中）

ボランティアの種類（重複あり）	延べ人数
高齢者福祉	0
子どもの学習支援、子ども福祉	3
博物館（動物園、開拓の村含む）・図書館	2
まちづくりや関連するイベント	2
病院ボランティア、ホームレス支援、障がい者支援	1
留学支援	0
その他（動物愛護）	1
海外ボランティア	4

表 26.　学生が参加したボランティア先 一覧（学生の体験報告票から転記）　（重複あり）

参加先		ボランティアの種類
さっぽろ・まなトピア	東白石児童会館 札幌市白石区本通 13 丁目南 10-1	子どもの学習支援
公益財団法人　札幌国際プラザ	札幌市中央区北１条西３丁目札幌MNビル３階 （SAPPORO こども領事 2016）	
北海道開拓の村	北海道札幌市厚別区厚別町小野幌 50-1	博物館・図書館（動物園、開拓の村含む）
札幌市円山動物園	札幌市中央区宮ヶ丘 3-1	
北海道大学農学部 北大マルシェ	札幌市北区北９条西９丁目	まちづくりや関連するイベント
北海道地域魅力市実行委員会	北星学園大学 北海道札幌市厚別区大谷地西 2-3-1	
特定非営利活動法人 TENOHASI	東京都豊島区千早４－１２－８　中村方	ホームレス支援
北海 Do ぶつ net	札幌市北６条西２５丁目１－６	動物愛護
Conservation Volunteers	Auckland（ニュージーランド）環境保護	海外ボランティア
Stadtforest Jena, Fuchsturmgesellschaft	Jena(ドイツ)　環境保護	
études Et chantiers NICE（日本国際ワークキャンプセンター)	Montaiut sur Save（フランス）環境保護	
CEC　JAPAN NETWORK	Nepal（ネパール）　被災者支援	

６． 活動内容

主な活動内容（実習計画書より抜粋）		ボランティアの種類
さっぽろ・まなトピア	ひとり親家庭の児童・生徒に対し、学習支援を行います。	子どもの学習支援
公益財団法人　札幌国際プラザ	SAPPORO こども領事 2016　学生サポーター 子どもたちの学習サポート	
北海道開拓の村	観光客への解説案内や演示活動	博物館・図書館（動物園、開拓の村含む）
札幌市円山動物園	円山動物園の来園者に向けて担当エリアにおけるポイントガイドや園内全体のガイド、さらにボランティア主催のイベントの手伝いを行う。	
北海道大学農学部	北大マルシェ 会場設営と店舗の販売補助。	まちづくりや関連するイベント
北海道地域魅力市実行委員会	まちづくり関連イベント。神恵内村での夏祭り手伝い。北星学園大学祭での出店。	
特定非営利活動法人 TENOHASI	炊き出し（野菜切り班、配食班）や越冬活動で、ホームレスの人々に衣類や食料を配付します。また炊き出しの準備も行います。	ホームレス支援
北海 Do ぶつ net	北海 Do ぶつ net（北海道内の犬猫保護団体の連合）が開催するイベントで犬猫の里親探しや啓蒙活動のお手伝いをする。またツキネコカフェで開店前の準備や猫のお世話をする。	動物愛護
Conservation Volunteers	Auckland（ニュージーランド）環境保護 環境保護活動（外来種の除去や植林）	海外ボランティア
Stadtforest Jena, Fuchsturmgesellschaft	Jena(ドイツ)　環境保護 森の道の整備、チェックポイントやシェルターの観察 。木の伐採や動植物の生態系を守る活動。	
études Et chantiers	Montaiut sur Save（フランス）環境保護 Contributing to do daily work of the farm.	
CEC　JAPAN NETWORK	Nepal（ネパール）　　被災者支援 村の子どもたちとの交流、家庭訪問、村の家屋の修復のお手伝い。	

主な活動内容	具体的な内容（体験報告票より抜粋）
さっぽろ・まなトピア	毎週日曜日（私が参加したのは隔週）、東白石児童会館で、ひとり親家庭の児童・生徒を対象とした学校の補習やわからないところの説明を中心とした学習支援を行った。学習支援は１回につき２時間、その後には約１時間のミーティングを行っている。学習支援中は、子どもたちの机を巡回し、子どもたちのニーズにあわせて勉強を教えたり、質問に応えたりした。
公益財団法人　札幌国際プラザ　SAPPORO こども領事	子どもたちの学習サポート

北海道開拓の村	まず、来正旅館にて、展示の案内を行いました。さらに、お土産の飴を購入頂いたお客様に、昔の飴売りの歌を、他のボランティアの方と一緒に披露しました。次に、旧青山家漁家住宅の担当になり、同じく建物や展示の解説をしました。当時の北海道における、にしん漁について説明を行いました。続いて、旧田村家にて蚕からとれた糸繰りの実演をお客様の前で行きました。最後に、総合案内への配置となり、先輩のボランティアの方に同行させて頂きツアーガイドの見学をしました。
札幌市円山動物園	3 月：先輩ガイドの方から研修を受ける。 4 月：ポイントガイドを行いガイドの雰囲気をつかむ。 5 月：担当エリア外の動物ポイントガイドを行い園全体のガイドを行うイメージを作る。 6 月：園全体のガイドを始める。また、平岸高校の生徒 20 数名をガイドし初めて団体を対象にしたガイドを行う。 7 月：外国からの来園者の方に積極的に声をかけることを心がける。 8 月、9 月：札幌を離れ都内の上野動物園やニュージーランドのオークランド動物園を訪れ現地のガイドボランティアと話し見識を深める。 10 月：留学生を対象にした園内ガイドを始める。
北海道大学農学部 北大マルシェ	21 日：会場設営(機材簿搬入、テント組み立て) (22 日夜：農家との交流会) 23 日：店舗(チーズ工房羊飼い)の販売補助
北海道地域魅力市実行委員会	毎週月曜日約 2 時間の地域についての勉強会、学校祭出店のための準備。 1 泊 2 日で神恵内村での夏祭り手伝い。 前日準備 1 日、本祭 2 日の北星学園大学祭での出店（栗山町、神恵内村、大空町に協力していただいた。）
特定非営利活動法人 TENOHASI	野菜切り班（11：00-16：00） ある寺院の境内でホームレスへの炊き出しに使う容器の洗浄、炊き出しの調理（野菜や肉を切る、煮る、米を研ぐ、炊く）を行った。 配食班（17：00-19：00 まで参加、活動自体は 16:20-19:30）東池袋中央公園で、衣類配布、炊き出しの配食を行った。片づけと掃除の手伝いも行った。月２回の通常の炊き出しだけではなく、年末年始の越冬活動としても活動した。
北海 Do ぶつ net	ツキネコカフェにて、店舗および猫ケージ、猫トイレのそうじ、猫のえさやり、またほかの北大生のボランティアへのご案内。保護犬猫の里親探しや動物愛護の啓蒙活動を主旨とするイベント。石狩わんにゃんフェスタなどのイベントで、ほかの北大生を誘って一緒にイベントの運営や動物愛護の啓蒙活動を行った。
Conservation Volunteers	・wooly nightshade　という木を除去した。（抜いたり、木を切り、切り口に毒をぬったりした。） ・育った木の下のほうの枝を切り、日当たりがよくなるようにした。 ・植林された木の周りの雑草の生育を防げるために、木のチップのようなものをまいた。 ・トラクターが通れるように道幅を広げる作業をした。

Stadtforest Jena, Fuchsturmgesellschaft	高い丘の頂上で景観 を良くするために木を伐採した。草むしりもした。苗木の植林と フェンス製作およびその設置。山道の整備。芝刈 り。小屋、ベンチのペンキ塗り。
études Et chantiers	Weeding in the garden. Harvesting potatos. Reinforcing the interior and applying varnish to the exterior walls of a cabin. For the Open Day cleaning up the pond. Preparing amusements for visitors. Being a staff at the parleing.
CEC JAPAN NETWORK	10 時から 14 時までは震災によって被害を受けた村へ移動し(ブンガマティという村)、そこで自宅が崩壊し、その村で一番貧しいために再建できずに困っている男性の再建支援活動をした。具体的には崩壊してしまい、住むことができなくなった住宅をとり壊し発生する瓦礫の撤去や瓦礫に埋もれているまだ使えるれんがを選別することであった。14 時からはその村にある小学校で折り紙を教える活動を行った。 1 クラスにつき約 30 分で、 3 クラスで教えた。合間の時間に簡単な日本語を教えた。

7． 学んだこと、気が付いたこと

活動内容	学んだこと気が付いたこと
さっぽろ・まなトピア	まず気がついたのが、「教えられない」という壁でした。自身があまり小学校時代勉強が得意ではなかったのに、準備不足のまま挑んだところ、学習障害、発達障害をかかえる子どものたちに対応する方法はあるか、教科書の“正統”な解説もわからず、さらに自分の悪いところを嫌というほど目の当たりにし、最初はこの活動を継続してもよいのか悩みました。しかし、子どもの抱える背景や新しい考えにふれ、世の中には私の持つ価値観と違う価値観があることに改めて気づかされました。将来、歯科医師となった際、自分の先入観にのみ頼らず、人の意見を聞こうとする態度に活かせると思います。子どもたちは他者（大人）の態度もよくみていて、それによって反応も異なってくると知りました。私は誠実でありたいと思いました。
公益財団法人 札幌国際プラザ SAPPORO こども領事	子どものやる気の向けさせ方、継続させるのが大変だった。
北海道開拓の村	最も実感したこととして、北海道の歴史や文化についての知識が非常に身に付いたと思います。また、他のボランティアの方やお客様との触れ合いを通して、他人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢が身に付きました。さらに、実際に社会に出ての活動だったので、人との付き合い方や言葉遣いなど、普段の授業にはない、大変貴重な経験ができました。

札幌市円山動物園	私がこの半年のガイドボランティアで学んだのは、来園者の方に自分のガイドを楽しんでもらうことの奥深さだ。毎回異なる来園者の方の興味や関心、希望の時間内に沿ってベストな内容、話し方、歩く速さ等の動作を考えなくてはならない。動物と接する時間を長くするために始めたボランティアだが、一番学んだのは動物のことではなく人とのかかわり方であった。また、普段の生活でもガイドの役に立ちそうな知識を積極的に取り入れようとするようになった。6 月には農学部で行われたオオカミのシンポジウムに参加し、7 月には 10 月末に新たに円山に導入されるハダカデバネズミの研究室を訪れた。さらに、夏休みに行ったニュージーランドでの語学研修も野鳥の保護区や動物園のガイドボランティアとの交流がなければあれほど実りあるものにはなっていなかっただろう。ボランティアを始めたことでより主体的に生物について学んでいく意欲が高まったと思う。
北海道大学農学部 北大マルシェ	21 日の設営の作業、および 23 日の店舗のサポータスタッフの仕事は体力的に大変でした。しかし、ほかのボランティアや運営スタッフ、また北海道内の農家の方々と交流できたことに関してはかなり収穫が大きかったです。特に、自分の関心のある放牧牛乳の農家さんと意見を交わすことができ、今後牧場見学が実現されるかもしれません。 そして、活動を通して感じたのは、海外産業の進出にもかかわらず、日本ではまだこんなに地域で自給的に農業を営む人がたくさんいることです。今回のイベントで地産地消の魅力が十分に感じられました。これからはそれを広める役を担いたいです。
北海道地域魅力市実行委員会	「本当に地域の方たちが求めていることは何なのだろうか」「活動によってどういったことができるのだろうか」ということを考えた時に、自分たちの考えや想像にとらわれるのではなく、実際に対話を重ねて探ることが必要なのだと学んだ。各個人で参加の度合いが異なる、得意とすることが異なっていてもそれぞれにやれることをやるという姿勢と周囲の理解が重要なのだと気付いた。
特定非営利活動法人 TENOHASI	・ホームレスの口腔衛生状態は総じて良くないことを活動の中で　気づきました。歯は健康を保つ上でも大切ですし、ホームレスの人が社会復帰を望むとき、“見た目”の一つとして歯も大きく関わってくると思います。“貧困と歯”という問題について考えると、様々な問題点が挙がります。この活動を終えて、歯学生として自分に何かできることはないかと考えています。 ・“見えないホームレス”の増加、東京都のホームレス排除政策というものを知りました。 ・貧困問題についてもより深く考えるきっかけとなりました。
北海 Do ぶつ net	・学生と社会人ボランティアのスタンスや理想などの違いが大きく、一緒に活動していくことに難しさを感じた。 ・動物愛護活動といっても、基本的には人間側の事情（飼い主や周辺住民など）を考慮しなければ、活動が持続できない。客観性をもって活動していくためにも、（専門家ではない）ほかの学生を一緒に活動に取り組んでもらうのは良いことだと思った。

Conservation Volunteers	外来種の木を除去するのはとても大変な作業だと改めて感じた。足場が悪い場所が多く、簡単には入っていけないようなところに生えている木もあった。また、植林は植えた後の手入れも大変で、長期的な展望が必要なのだということを感じた。自分が思っていたよりも手間がかかり、根気のいる作業なのだということが分かった。
Stadtforest Jena, Fuchsturmgesellschaft	ドイツは本当に緑が多い。電車からの景色も始終木だし、首都だろうと、とにかくあちこちに自然があふれている。フォレスターに聞いても、森林の勉強をしたいのならドイツが一番 だというということ。ちゃんと森、山が管理されていて、日本ではボランティアとしてしか存在 しない内容が職業として確立されている。
études Et chantiers	The importance of sharing your thoughts and feelings to cooperate with each other to achieve something. The importance of pursuing what you think is right or what you really want to do no matter what others would say.
CEC JAPAN NETWORK	・自分の未熟さと学びの可能性 ネパールへボランティアに行くという経験をしてみて、私の計画性・行動の持続性が乏しいということを改めて認識した。それと同時に、異なる価値観を学ぶことに対して積極的になれるということがわかった。 ・ボランティアの意味 「私たちのような素人がやっても意味あるのかな?」とはじめは思っていたが、私たちが行動することによって現地の人々をやる気にできた。ボランティアで重要なのは行動だけではなく、それに伴う人とのコミュニケーションだと思った。

８． ボランティア参加の動機や理由

ボランティア参加の動機や理由（実習計画書より抜粋）「実習終了者」１名含む。

種類	実習の動機	実習目標
さっぽろ・まなトピア	木村先生のご紹介で、この活動を知りました。私はウクライナ人に家庭教師をした経験があり、様々な背景を持つ子どもの学習支援活動でその経験を活かす事を希望していました。また、面接を受けた際、白石区でのまなトピアでは若い女性のボランティアが不足していると聞き、まさに今私が必要とされているところで活動がしたいと思い、そこでの実習を希望しています。	将来、歯科医業を行う際、全ての人(患者さん・医療従事者)に対し、平等に接する事は非常に大切な事であると考えています。私は人と関わるのが大好きなのですが、人見知りをしやすく、打ち解けるまでもじもじしてしまい自分の意見をストレートに伝える事が得意ではありません。今回のボランティア活動では、ボランティア、札母連の方々、児童・生徒など多くの人との関わりを通して、他者との信頼関係の築き方や意思疎通の図り方を学びたいです。私が学ぶと同時に人の役

		に立てるということがボランティア実習の魅力だと思います。加えて、北海道大学などいつも過ごしている枠を超えて社会に参加し、今自分が持っているスキルを社会に還元する事ができたら幸せです。
公益財団法人 札幌国際プラザ SAPPORO こども領事	興味があった分野だったから。	子どもたちのサポートの仕方。実際に担当となった国について学ぶ。
北海道開拓の村	私は、文学部に所属しているということもあり、歴史や文化といったものに大きな関心がありました。そして、引っ越ししてまだ年数が立っていない北海道の歴史についてもぜひ学んでみたいと思い、そのためには開拓の村でのボランティアが好適だと判断しました。また、国内外から多くの観光客が訪れる当施設なので、展示の解説などを通じて様々な方と話すことができるというのもきっと大きな経験になると思い、希望しました。さらに、現時点で自分が有している北海道についての知識を、少しでも社会に還元したいとも考えたからです。	まず、多様な方々（ボランティアの先輩方・国内外からの観光客）と接することを通して、どんな人とでも話し合えるようなコミュニケーション力をつけたいと思います。さらに、海外からの観光客に英語で解説することによって、「生きた英語」を自然な形で身につけたいとも思っています。そして、当ボランティアを希望したきっかけでもある北海道の歴史や文化について、他人に十分説明できるほどの知識を蓄えていきたいです。また、ボランティアを体験することによって、自分が知らなかった社会の一面についても身をもって学びたいと思います。
札幌市円山動物園	小さい頃から動物が好きで、動物の魅力を人に伝えるガイドボランティアが魅力的に感じたため。また、年代や性別、国籍問わず多くの人と話す活動は新渡戸カレッジの目指すグローバル人材に必要な素質を磨く良い機会になると考えたため。	人に自分の伝えたいこと（動物園の魅力）を上手に伝える技術や幅広い人と関わるためのコミュニケーション能力の向上を目指したい。
北海道大学農学部 北大マルシェ	食べ物にまつわる仕事に関わることができ、また農家さんやボランティアの学生と交流できるから。また、「人・まち・未来を食でつなぐ」というイベントの主題に関心をもったから。	食べ物がいかにして私たちの食卓に届くかについてイベントを通じて学びたい。
北海道地域魅力市実行委員会	元々地域について興味があり、自分たちで学びながら地域の活性化の足がかりをつくるというところに興味がもてた。実際に学祭に出店すること	実際に過疎地域に足を運び、現地ではどういった問題があり、どういったニーズがあるのかを自分たちの目で見て、聞いて確認する。それを踏まえて

	でただの活動に終わらせるのではなく、今後の活動につなげられるようにするという考えを持った活動であったから。	継続性があり、自分たちでやれる活動を企画する。 過疎地域の現状を知ることに加えて、自分たちで何がやれ、何ができないのかを見つめたい。そうして形にした活動で実際にどれだけ地域の役に立てるのかを学びたい。また専門分野である組織論と合わせて、活動を通じて集団で企画をつくり行動することの難しさや利点も学びたい。
特定非営利活動法人　TENOHASI	ホームレスの実際を見て、視野を広げようと考えたから。	ホームレスが社会とどうかかわっているのか、また私たちがどう関われればよいのか。
北海Doぶつnet	「犬部」という本から、自分たちで犬猫保護をするような活動をしている学生団体のことを知り、私も同様にほかの学生とともに動物愛護活動に参加し、動物愛護の手助けになりたいと思った。	動物愛護活動に関して理解を深め、その現状をできるだけ多くの学生にも知ってもらい、自分が引退した後も活動を継続してもらうこと。
Conservation Volunteers	北海道大学に入学してから、高い英語のコミュニケーション力やリーダーシップ、積極性にあふれる人々と出会う中で、自分をもっと成長させたいと思うようになり、海外でのボランティア活動という新しい経験をしてみたくなったから。さらに、環境保護は自分にとってとても興味のある分野であったから。	自分の意見をもち、それをしっかり相手に伝えるといったような主体性を伸ばし、環境保護についても新しい知識を学べたらと思う。
Stadtforest Jena, Fuchsturmgesellschaft	第一に、とにかく海外に行きたい気持ちがあった。留学はするつもりだが、それは語学習得が第一の目標であり、わたしが将来最終的に掲げる、海外で環境保護活動をするという夢の通過点である。今の英語力では、留学してもあまり身にならないが、内容が身になるボランティアなら、現段階でもできると思った。将来海外の環境保護団体か、レンジャーとして働きたい。環境保護団体やレンジャーの手伝いのあるこのプログラムに大きくひき付けられた。プロジェクト内容は、環境保護に絞って探して、具体的な環境保護団体名があがっているこのプ	海外で環境保護活動がしたいという漠然とした夢しかないため、何か具体的な方向がつかめたらいいと思う。環境保護団体の仕事内容、現状を自分の目で見たい。また、世界のいろいろな人と価値観をぶつけ合いたい。

	ロジェクトを選んだ。また、バイトの関係で、8月と9月にまたいでいるプロジェクトが良かった。	
études Et chantiers	昨年参加し、とてもよい経験となったので、地元の人々と旧交を温めつつ、また少しでも力になりたいと思いました。	世界中から来る人々と共に暮らし、共に働く経験を積みたいと思います。その中で、環境問題に対する理解を深めたいです。
CEC JAPAN NETWORK	ネパールで震災があったことは知っていたが、身近な問題として近くになかった。今回、所属するゼミでネパール震災復興支援のため募金活動をはじめたことで、ネパールの抱える問題について知り、興味を持ち、震災で被害を受けるということを自分の目でみて知りたいと思ったのが理由です。	このプログラムでは、ネパールでホームステイをしながらボランティアを行います。ですので、ボランティアとホームステイで自国との生活水準の差や、国民性の違い、そして自分の可能性について学びたいと考えています。また、最も大きな目標は、震災で何かしらの傷を負った子どもたちにすこしでも温かい気持ちを伝えることです。

9. 教員への要望

教員への要望
一年掛かりの授業は少々長いのかなと思いました。もう少しスパンを短くして、集中的に行うのも良いのではと思います。
I'd appreciate it if you could give we a chance to introduce NICE to students of this course. NICE is a Japanese NPO promoting international volunteer activities called "vorkcamp" in and outside of Japan.
活動計画・人員募集においてもう少し大学側から情報提供などのサポートがほしかった。
海外へボランティアに行く際、補助金などがでればよいなと思った。

10. 参加先からのコメント

参加先	参加先からのコメント
さっぽろ・まなトピア	いつも笑顔で子供たちに接してくれていますが、優しすぎる所があります。ですが、積極的に子ども達に声を掛けてわかりやすく教えてくれています。
公益財団法人 札幌国際プラザ SAPPORO こども領事	熱心で子どもたちともすぐにうちとけていました。また、チームを引っぱっていく積極性もあり、ムードメーカーとして大活躍でした。

北海道開拓の村	ボランティア活動の解説案内、蚕の飼育(糸繰りの実演) 等、ボランティアの助言を素直に受け入れ、 Ｔさんの積極的な活動姿勢は評価を受けていました。今日の経験を今後の学生生活、社会生活に活かしてもらえれば幸いです。
北海道地域魅力市実行委員会	Ｓちゃんはよく頑張ってくれました。後輩への良い刺激にもなったと思います。次の活動でも期待しています。
特定非営利活動法人 TENOHASI	二日間、明るく積極的に参加してくださいました。
Conservation Volunteers	Excellent participation and initiative. Worked very well. A pleasure to have on team.
études Et chantiers	I enjoyed work with K. He is always voluntary and has a lot of capacities. He is able to work in different areas and is a leader for the group.
CEC JAPAN NETWORK	She is very friendly and energetic person, and cooperate each other when she does her volunteer work with other applicants.

学生たちによるボランティア体験報告

ニュージーランド　Atiu Creek Regional Park　での自然保護活動

S．Y

1活動先と活動日時

CIEE を通して Conservation Volunteers という現地の団体に受け入れていただいた。活動はオークランドの Atiu Creek Regional Park という場所で行った。牧場や森がある海辺の公園だった。活動は、2015 年 8 月 23 日から 27 日と 8 月 30 日から 9 月 4 日の 10 日間行った。活動時間は 8 時から 16 時だった。

2 活動内容

1 週目は 1 人のリーダーと 7 人のメンバーで、2 週目は 2 人のリーダーと 8 人のメンバーで作業を行った。メンバーの国籍は、2 週間で合わせて多いほうから順に日本、イギリス、ドイツ、台湾だった。

一つの作業を続けて行うのではなく、作業内容は日によって異なったので活動内容は多岐にわたった。大きく分けると外来種の除去と植えられた植物の手入れ、公園内の整備の 3 つにわけられる。外来種の除去と植えられた植物の手入れは主に環境保護を目的としていて、公園内の整備は、景観を整えたり公園内の利便性を高めたりすることで、観光客を呼び込んで公園に流れるお金を多くし、より公園の環境保護活動を行いやすくするという目的がある。

まず外来種の除去について書く。植物については、wolly nightshade という外来種の木と、詳しい種名はわからないのだが松の一種の木の除去を行った。wolly nightshade は小さなものは手で抜き、大きなものはのこぎりで切ったあと切り株に毒を塗った。松の一種の木はのこぎりで切ったあと切り株に毒を塗り、大きくて切れないものには穴をあけ、毒を注入した。また、ポッサムという動物を取るために仕掛けた罠の状況をチェックして回った。今回はどの罠にもポッサムはかかっていなかった。

次に植えられた植物の手入れについて書く。周りの雑草が大きくなってしまうとせっかく植えた木が育たなくなってしまうので、腐葉土と木のチップが混ざったようなものをまいて、雑草を覆い、雑草の生育を妨げた。また、丈の低い木は支柱を使って支えていたのだが、大きくなってきた木はその支柱がいらなくなるので、支柱を取り除いて運んだ。

最後に公園内の整備について書く。正確に言うと公園内の整備だけではなく、滞在していたボランティアハウスの敷地内の整備もした。具体的には、公園内の道幅を広げるために道の端の丘のようになっているところを削ったほか、ボランティアハウスで飼われていた羊を放すための囲いの中の掃除や庭の雑草取りをした。また、景観保全のために木の下のほうの枝を切ったりした。

3 ボランティア活動を体験しての感想

ボランティア活動をやってみて、いくつか自分が思っていたのと違ったことがあった。

まず、10 日間でできることは限られていたこと。10 日もボランティア活動をグループでやったらきっと大きな達成感が味わえるのだろうなと思っていたのだが、現実はそう甘くなく、

10 日間の間で自分たちが手を付けられたのは広い公園のほんの一部分であり、できた作業もほんの少しだった。自然保護というのは自分が思っていた以上に手間も時間もかかることなのだと実感した。

また、グループワークでは自立性が求められるということをボランティア活動に参加してから参加する前より強く感じた。仕事の内容についてはリーダーから説明があるが、それ以外の食事作りなど生活に関することについては特に何も言われないので、自分から、何か手伝うことがあるかと聞くなど、行動をとらないと手持無沙汰でただ突っ立っているだけになってしまう。なので、自立して自分から動くことはとても大切だと感じた。

4 ボランティアを通して得たもの

ボランティア活動を通して、たくさんの刺激を受けることができた。海外という特殊な状況でのボランティアだったので海外に関することが多いのだが、その中から 2 つ書いてみようと思う。

1 つは、ボランティアとは直接関係ないのだが、ドイツの人の英語力がとても高かったこと。英語は同じ第二外国語であるはずなのに、とてもきれいな英語を話していたのですごいと思った。私自身は、会話が聞き取れず、コメントを挟むのにすごく苦労したので、もっと頑張らなければと思う。

もう 1 つは、同じようにボランティアに参加していたほかのメンバーたちはとても活動的だったことである。活動的な人にたくさん出会えたのは、ボランティアだったからこそではないかと思う。海外アルバイトをしながらニュージーランドを旅行する、いわゆるワーキングホリデーをしている人、6 週間もボランティア活動に参加する予定の人、一人でこれまでにいろいろな国を回ってきた人。最初に私が一人でニュージーランドに 2 週間行くと決めたときは、自分としてはとても大きな決断をしたつもりだったのに、そういう人たちに囲まれると、なんだかこのくらいたいしたことないかという気分にさえなった。実際、ヨーロッパから来た人々に、「はるばるニュージーランドまで来て、たった 2 週間で帰るなんてもったいない！」と言われてしまった。ヨーロッパの人の感覚からするとアジアの人々が 1 週間や 2 週間で帰ってしまうのがもったいなくて仕方がないらしい。とはいえ、一人で海外に行くのは初めてであったし、ボランティア活動もほぼ初めてであったから、とりあえず今回は 2 週間がちょうどよかったと思う。次に海外に行くことがあったら、そのときは今回であった活動的な人々の言葉が、背中を押してくれるかもしれない。

ボランティアを通して、いろいろな人に出会うことができた。このプログラムに参加してよかったと思う。

ドイツの環境保護ボランティア活動報告書

M. O

2015 年 8 月 23 日から 9 月 6 日の平日の間、ドイツの都市 Jena で環境保護のボランティアを行った。夏の間に何かしたいとは思っていたが、今の英語力で留学や語学研修をしても実のあるものにならないと考え、単純に自分の興味のあることをすることに決めた。将来海外の自然の中で働きたい。小さいころからボーイスカウトで野外活動をしたり、ドキュメンタリー番組を見て、自然、環境、野生動物、生態系といったワードに興味があった。そのほか日程も含め条件を絞った中で、国際ボランティア機関 ciee のプログラムの中から今回のプログラムを選んだ。

ボランティア参加者はヨーロッパ人 9 人、アジア人 2 人（うち日本人 1 人）の計 11 人だった。全員、母国語が英語でない国籍で、ドイツ語が話せるのは 4 人だった。現地でお世話になったドイツ人は英語が話せる人も話せない人もいたが、いずれにせよドイツ語が母国語なので、4 人のうち 2 人が主に仲介役として説明を聞いて訳してくれた。

ボランティアワークは平日だけだと知らずに、23 日から始まるものだと思い、22 日に Jena に着き、1 泊して集合場所に行った。めいめい集合時間もばらばらだった。

次の日からワークが始まった。1 週目は Stadtforest Jena というレンジャーとフォレスターのグループと働いた。滞在先から車で 30 分くらいの森で景観改善のため木を伐採したり、植林と、苗木を草食動物から守るためのフェンスの制作、設置を行った。フェンスは、長さ 3 メートル、横 5 センチの板を切って、釘を打って作った。設置は、ポイントの周りに 8 つのフェンスを裏表交互に組み合わせて円形になるように行った。その際も釘で合わせた。植林は、斧のような道具で穴を掘って、そこに苗木を置き、土をかぶせ、踏み固めた。1 つの囲い内に、20 個以上の苗木を植えた。雨の日もあったが、雨具を着て作業を行った。森の中なので、大してぬれなかった。地形によって、柵が盛り上がってしまったりするので、地面をならしたり、釘が曲がってしまってやり直したり、道具をなくして探し回ったりと、意外と円滑に進まなかった。

2 週目は Fuchsturmgesellschaft という環境保護団体と働いた。滞在先から車で 20 分くらいの山の上で、芝刈りや落ち葉集め、小道のわきの枝払い、除草、道の整備を行った。ほかに建物やベンチのペンキ塗りやオーディオの設置を行った。なにしろ気温が高く（44℃といわれた）、汗だくになりながらの作業だった。除草では、機械を使った人は楽な作業だったが、はさみに当たった人には大変な作業だった。土をリヤカーで運んで坂道をならす作業が一番重労働だった。二人一組で下の道から土を運び何往復もして、最後にハンマーで土を押し固めて完成させた。

ボランティアを終えてみて、ボランティアワーク自体を振り返ると、ボランティア団体を通した時点で予想はできたことだが、すべてが用意されている仕事で、デモンストレーション付きの、いわゆるパックツアーのようなものであり自主性が光るわけではなかった。また、環境保護といってもそう感じられたのは植林くらいで、あとはすべて人間のためだったところががっかりした。しかし、今の時代人間を抜きにした環境保護など現実的でないので、これはこれでためになったと思う。

ワーク外で得られたものは大きかった。実践的な英語も体験できたし、各国の生活も垣間見られた。同じ作業をするというのがつながりやすかった。何より、メンバーともっとコミュニケーションをとりたい、また会いたいという思いから、英語の勉強のモチベーションが上がった。また、日頃から友だちの発言に気の利いた言葉を返せるように訓練しようと思う。英語ができなくても馬鹿じゃないので、自分にできることは探せば割とあった。ワークの時間よりよほど自主性を試された。おかげで、みんなにかわいがられたし、楽しく過ごせた。

このプログラムを選んだのは単純に自分の興味のあることだからで、将来の具体的な見通しを立てるのに役立てたかった。今までカナダに留学しようかと考えていたが、今回ヨーロッパ人の友だちがたくさんできたのと、フォレスターに森林をやるならドイツが一番いいと言われたことで、ドイツに留学したいと考えるようになった。確定ではないが、前より少し目の前がはっきりした。

最後に、わたしはよく日本人らしくないといわれるし、わたし自身日本人の友だちといて窮屈に感じることが多い。しかし海外で生活してみて、結局は日本人が染みついていると感じた。わからないけどわかった風にふるまうこともよくあったし、自分の意見を持っていないと感じた。仕事においてわからないことをそのままにするわけにはいかないので、染みついた消極性を直すように今後は生活していきたい。総合的に見て、自分の今後につながる体験ができた。

開拓の村でのボランティアを通して学んだこと

Y．T

①活動先、活動日時

北海道開拓の村において、平成 27 年 8 月 10、17、24、26、31 日の五日間にわたり、それぞれ 9 時半から 16 時半までボランティア活動に従事した。

②活動内容

観光客への解説案内や演示活動が主な活動であった。初日は副館長のN氏から施設について、実際に村内を周りながら説明をしていただいた。最初は来正旅館の担当になり、建物や展示の歴史や用途を説明した。加えて NHK 朝の連続テレビ小説「マッサン」のロケに使われたということも含めて解説する場合もあった。またおみやげの飴を購入した客には、昔の飴売りの歌も披露した。翌週は旧青山家漁家住宅で同じく解説や案内のお手伝いをした。「鰊御殿」に代表されるように、当時の主産業であったにしん漁について説明を行った。現在は廃れているにしん漁だが、北海道を知るうえで欠かせない歴史を学べた。続いて旧田村家にて、蚕から取れた糸繰りを実演した。自分にとっても初めての経験であり最初は苦労したが、小さい子供からお年寄りの方までかなりの好評を博した。最後に総合案内のほうに配置され、先輩のボランティアの方に同行し、村内を一周して案内するというツアーガイドの仕事を見学した。知識の深さのみならず、本当に上手にお話をされていたので、学ぶべき点が多かった。また全日ボランティア活動の開始前と終了後に開かれるミーティングにも参加し、その日の予定や目標、振り返りを必ず全員で確認した。

③活動を体験しての感想

やはり案内を通して自分自身も、北海道の歴史や文化についての知識が非常に身についたことを実感している。とりわけ開拓の礎となった建物などを自分の目で見ることができたのは、決して教科書の勉強だけでは得ることのできない体験であった。また普段の大学生活では接する機会のない世代の先輩ボランティアから、活動に限らず様々な含蓄に富んだ話を聞くことができ大変興味深かった。これからの学生生活や人生を考えていく上でも、頂いた助言をぜひ生かしていこうと思う。一方で観光客との触れ合いを通じて、他人と上手なコミュニケーションを図ることの難しさを感じることもあった。全国あるいは世界中から人々が訪れる施設であるので、当然バックグラウンドや興味の対象も多種多様である。そこに年齢の幅が広いということも加わる。一見先輩は何気なく解説をされていたが、実は熟慮を要するものであるということが分かった。それぞれの客に応じて話し方や話す内容を合わせていこうとする姿勢が重要で

あろう。だが苦労はしたものの、実際に社会へ出ての活動を続ける中で、他人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする積極性が身に付き、人との接し方や適切な言葉遣いなど社会人として必要な能力を徐々に高めていくことができた。

④活動を通した新たな気づき

反省点として、北海道や開拓の村についての知識は十分ではないため、満足な案内ができなかったことがままあった。そのような場合は、出身や来道した目的など客自身について、あるいは開拓の村の感想を尋ねるなど、異なる角度から話を広げる努力をしていくべきであった。また先輩ボランティアは経験も豊富なため、ボランティアはすでにある程度完成した形を成していた。したがって、自分から何かを働きかける機会を見つけられず、主体的に行動ができないまま活動を終えてしまった。しかしそのような中でも、自分にしかできないことを探していくことは可能ではないかと思われる。例えば年齢の若さを生かして、大勢訪れる客に機敏に応対したり、若い世代の客に、話を合わせやすい自分が積極的に解説をしたりしていくことなどである。活動を通じての発見や変化として、知識が不足していたからこそ、北海道の歴史についてさらに学ぼうと思うようなった。再度開拓の村に訪れたり、開拓の歴史を記した書籍を読んだりして理解を深めていきたい。今回の活動では、総じて社会との交わりについて学んだといえる。いずれも大学にいるだけでは実感できないことばかりであり、自分の目で見て肌で感じることの大切さを実感した。だが決して学問をおろそかにしてよいというわけではなく、大学で学習したことを社会に還元し、また社会で得られた経験を学習にフィードバックするというように、大学内と外での経験を両輪に据えてこれからの学生生活を送るべきであると思う。最後に、ボランティア活動に参加し貴重な経験を得る機会を頂いたことを本当にありがたく思う。活動の機会を用意してくださった木村・川畑両先生、参加先としてお世話になった北海道開拓の村の職員やボランティアの方に感謝申し上げたい。

北海道地域魅力市～過疎地域から学んだこと～

S．S

1.　活動先、活動日時について

ボランティア受け入れ先：北海道地域魅力市実行委員

活動期間：2015 年 5 月 1 日～2015 年 10 月 31 日

活動日時：定例議会　毎週月曜日 18 時～20 時

神恵内夏祭り、星学祭 10 月 10 日～12 日

2.　活動内容について

北海道地域魅力市を開催するにあたって①事前学習、②企画作り、③自治体（栗山町、神恵内村、浦幌町→大空町に変更）との調整、④星学祭での出店という４点で活動した。事前学習としては人口減少やそれに伴う過疎地域の抱える問題点、協力をお願いいただく市町村にこと、若者と地域のつながり方などを学習した。地域のことを専門として学ぶ学生を中心としながらも、各々興味を持ちながら様々な切り口で理解を深めた。企画作りでは活動の目的の共有から始め、学生である自分たちができることとできないことを明確にした上で各地域のためになる活動づくりを意識して行動した。市町村の魅力をより伝えるための広報の方法や実際に星学祭で提供するメニューの考案、試作などを行った。そしてそれらをまとめ自治体の方に提案しご協力いただけるようプレゼンテーションなどを行った。各自治体からは食材を購入するにあたって希望するメニューや広報内容などを確認し、調整を行った。その際に自分たちはどういう目的を持ってどんな活動がしたいのかということを明確に伝えるということに重点を置いた。そして星学祭（北星学園大学大学生）にて北海道地域魅力市と題して、神恵内産さきいかのお好み焼き、栗山町産さらさらレッドのオニオンスープ、大空町産の知床牛のすきしゃぶの３品を出品した。同時に協力いただいた各自治体の紹介掲示とパンフレット作り・配布を行った。また、神恵内村で夏祭りの手伝いもさせていただいた。会場設営、縁日、出店や当日の司会、片づけなどを体験させていただいた。私自身は参加していないが、一部メンバーはより深く地域と関わり、地域を学ぶために約１カ月にわたって民宿にて住み込みのアルバイトを経験した。

3.　活動の感想、活動から学んだこと

活動を通じて感じたことは数多くある。まず自身で「田舎って素敵なところだな」とその魅力を再認識できたことである。北海道・札幌でずっと育ってきたにも関わらずこれまで北海道の地方を実際に訪れたり、地域の問題などを深く学んだ経験は無かった。しかし活動を進める中で実際に現状を目にしたり、自分たちでもできることなどを知ることにつながった。ボランティアには関係ないが、自身の所属する部活の皆で毎年行っているキャンプ場として神恵内村を選ぶなど、自身の日常の興味や選択にも大きな影響を与えている。

また仲間と動くことの難しさを感じた。活動中に生じた問題として、活動に物足りなさを感じて離れたメンバーがでてしまったことである。これは各個人ができる範囲で活動に参加していることに対して温度差を感じ、一体感が生まれていないことにたいする不満が原因であった。このことをきっかけとして「やれる分だけでいい。でもその分だけはしっかりやろう。」という共通の認識を持つことができた。積極的に前にでて意見するのが得意な人もいれば、協調性を大切にする人もいる、熟考しながら足りないところを補ってくれるような人もいる。それぞれの得意とするところを互いに評価することのできる組織になった。こうした心がけ１つで雰囲気や活動の進み具合が大きくかわるのだということを学ぶことができた。こうした学びは自身の専門でもある経済学の組織論やマネジメントにも通じる点が多くあり、大学での学びとの結びつきによって客観的に活動を振り返ることにつながると考えている。

大人との関わりを通じて難しさを感じることもあった。この活動は学生たちが企画し、自分たちで自治体に企画を売り込むものであったため、自治体から厳しい意見をいただくこともあった。まず自分たちは何者なのか、そしてなぜ、どんな活動をしたいのか、そのためにどういったことをお願いしたいのかということをしっかりと伝える必要があった。しかし計画の甘さや勉強不足などのためにお願いしに行ったにもかかわらず多くのことを教えていただく結果となったこともある。組織として活動する以上、きちんとした準備で万全の態勢で臨まなくてはならないということを再認識できた。

活動を通じて最も嬉しかったことは魅力市開催時に「大空町ってどこにあるの？」「学生がこんなことしてるのね。」などと日常生活で過疎地域とかかわりの薄い方からも地域について興味をもっていただくことができた点である。これは私たちの活動の最大の目標である「過疎地域のことに興味・関心をもってもらう」の達成を感じられたことである。自分たちがやれることは多くはないが、それでも何かできるのだという実感をもてた経験は今後の大学生活や社会に出てからも大いに役にたつと考えている。

フランスのある農場での生活

K.F

① 活動場所・日時

フランスは南部トゥールーズから車で 30 分ほどの小さな村にあるブジーグ農場で、9 月 3 日から 15 日までの約 2 週間、 études Et chantiers という NGO 団体と仕事をした。

② 活動内容

基本的には農家のお手伝いをするという形で、庭園の草むしりからジャガイモの収穫、その他、物置小屋の外壁にニスを塗り、内壁を補強する作業なども行った。 1 週目の日曜日に開催された Open Day と呼ばれる農家の一大イベントに向けて、ため池を掃除し、自然体験型娯楽コーナーの整備を行った。当日は駐車場の案内係として働いた。なお、このイベントは「自然とともに」生きる方法や楽しさを伝え、環境問題に対する関心を促す目的の下に毎年開かれており、1500 人規模の来場者がある。

③ 感想

ブジーグ農場でお世話になるのは昨年に引き続き 2 回目である。よくなぜ同じところに行ったのかと聞かれるが，前回がとても楽しかったからとしか答えようがない。日常とは全く異なる環境の中で、自分とは全く異なる生活をしている人々と一緒に 2 週間汗を流した経験はあまりにも新鮮すぎたし、ブジーグなら間違いなくその喜びをもう一度味わえると思ったからである。ジョセフをはじめ、農家に住む人々はみな温かく親切で、故郷に帰ったような気持ちになる。今年は特に近所の農家さんや、ブジーグが本拠地となっている環境団体、そして études Et chantier のメンバーとも多く交流する機会があり、大変刺激になったし、昨年も会った人々に名前を覚えてもらっていたことには感激した。

2 年目にしてずいぶん受け入れられたような気もするが、やはり言葉の壁は高かった。地元の人はほとんど英語を解さないため、もっといろいろ話がしたいのに意思疎通ができなくてもどかしい思いをしたことは 1 度や 2 度ではない。フランス語ができなくては、フランスのコミュニティに入ることはできないと改めて痛感した。去年から 1 年間勉強を積んだため、聞く方はまだ何とかなったが、フランス語で自分の考えを発信することは全くといっていいほどできず、悔しい思いをした。

また、僕の他に日本人が 2 人もいたことは正直誤算だった。フランスにまで来て日本語を聞きたくはなかったので、いつも一緒にいるMさんとＥさんとは一定の距離を置いて過ごした。それはそれでいいのだが、さらに事態をこじらせたのはＣさんの存在である。Ｃさんはフランス人の女の子で、僕は去年も一緒に仕事をした仲である。恐らく自閉症気味なのであろう彼女は、本来このようなグループ・ワークには向いていない。それを自覚しつつも、克服しようとして今年もブジーグに来た。しかし、体力的にも他の人より劣るため、すぐ仕事を休んで煙草を吸っていたり、テントに引きこもって一日中寝ていたりしていた。夕食後、みんなでゲーム

をしたりする時も、一切参加することはなかった。そんな彼女を見て、特にMさんは不満たらたらで、よくＥさんに日本語で愚痴をこぼしていた。今回のような国際ワークキャンプにおいて、これは禁物である。日本語でしゃべられると、他の人は何を言っているか分からない。それでもネガティブなことなのは何となく察するため、不信感が募ってしまう。一応、２人にはＣさんの事情を説明したが、それでも腹の虫は収まらなかったようだ。僕は昨年も同じようなことを経験していただけに、もっと強く２人には言うべきだったし、何よりも、事前にＣさんのことをみんなに理解してもらう努力をすべきだったと反省した。

④　学んだこと

Ｃさんについてだけではなく、MさんとＥさんは、みんなで食事をしている時なども、日本語でしゃべることをはばからなかった。これでは意思疎通できるはずもない。一定期間一緒に暮らして一緒に何かをしようとするのであれば、自分が考えていること、感じていることをみんなと共有することが何よりも大事であると実感した。もちろん一体感を生み出すためでもあるが、それよりも１人１人が疎外感を覚えたり、嫌な思いをしたりすることなく仕事を全うする上で重要だ。この教訓は、将来国際協力の現場で間違いなく生かされるはずである。

最後に、なぜ僕がブジーグに惚れ込んでいるかというと、そこには純粋に幸せを追い求め、勝ち得ている人々が集まってくるからである。農家の人々ももちろんそうだが、études Et chantier のメンバーと接すると多くを考えさせられる。みな基本的に英語を話せるし、学歴も高い人が多い。それでも名声や富に固執するのではなく、理念に共鳴して、ほとんど稼ぎにならない無名のNGOに入って働いている。都会の疲れた日本人しか見てこなかった僕にとって、彼らはとても活き活きとしていたし、何より幸せそうであった。誰から何と言われようと気にせず、自分の気持ちに素直に生きる。人生において最も大切なことを彼らは身をもって教えてくれる。

円山動物園ガイドボランティア活動報告書

Ｊ．Ｋ

１．活動先・活動日時

私が活動先に選んだのは円山動物園ガイドボランティアである。2015 年 1 月頃動物園のホームページで新しくボランティアを募集していることを知りすぐに応募した。幼い頃から動物が好きな自分にとって動物園に関わるボランティアはぴったりだと感じた。同年の 4 月に正式にボランティア団体に登録され現在も月に数回動物園を訪れている。

２．活動内容

園内で私が行っている活動は大きくポイントガイド、園内全体のガイド、そして道案内の 3 つに分かれる。これらの活動はどれも来園者の方々に動物園を楽しんでいただくために必要なサービスだ。

ポイントガイドでは自身の担当エリア内の獣舎で動物に関するガイドや来園者からの質問に答えた。私の担当動物はヒグマ、オオカミ、ホッキョクグマをはじめとしたエリアで来園者の注目を集めやすかった。そのため比較的多くの人にガイドできたと感じた。また、時に団体の来園者に向けて園内全体をガイドすることもあった。私は 6 月に札幌市内の高校生にガイドを行った。この時団体側から与えられた時間内にガイドを収めるために動物ごとのペース配分を工夫したことが印象に残っている。

そして、ガイドを初めて間もない頃最も対応に困ったのが道案内である。ガイドボランティアが最もよく聞かれるのは、動物に関する質問ではなく施設のことである。ガイドを始めて間もない頃赤ちゃんを連れた方に授乳スペースやおむつ交換のできるトイレの場所を聞かれて答えに詰まったのは動物園での自身初の失敗だった。

３．活動の感想

ガイドボランティアで最も感じたのは来園者を楽しませることの奥深さだ。私がガイドを始めるまでは動物の知識を身に付けなければとばかり思っていた。しかし、ガイドのために必要なのは動物の知識だけではないとすぐに気づいた。来園者に情報をきちんと伝える能力がないと自分の知識が全く無駄になってしまうのだ。例えば、お年寄りの来園者に対してゆっくり話したり、小さな子に対して砕けた口調で話したりすることで内容が伝わりやすくなる。伝える内容と同じくらい伝え方が重要であることをこの実習で強く感じた。

また、多くの人とコミュニケーションを取れたことも印象的だった。大学で過ごしていると出会う人はどうしても限られてくる。一方、動物園で出会う人は年齢、性別、国籍まで制限が全くない。そんな環境で多くの人とコミュニケーションをとるという体験は自分にとって非常に刺激的なものだった。

4. 活動を通じた新たな発見や学び

活動を通じて学んだことは主に二つある。一つは動物の持つ多面性である。ガイドを始めたての頃は動物の生態だけを話していた。しかし、ガイドのために動物を調べていると動物単体の生態だけでなく動物と他種のかかわりや、人とのかかわりに興味がわいてきた。例えば担当動物のヒグマは、生態も十分に面白いが、アイヌ民族とのかかわりや現代のヒグマと人のかかわり、そこから見えてくる環境問題を調べるとさらに深みのあるガイドになる。動物園の動物は種ごとに区切られているが野生動物は人間を含むほかの生物とともに暮らしているのだ。当たり前のことだが野生動物から離れている現代では忘れてしまいがちなことだと思う。いろいろな分野から動物を見つめる楽しみをこの実習で強く感じた。

もう一つは来園者が動物園で楽しく学ぶには自身が楽しく学ぶ必要があるということである。大学の授業や本から学んだ知識の中で自分が楽しいと思ったことを話すと来園者の反応が良いことが多い。また、そういった反応があると自分の学習に対するモチベーションが上がる。つまり、自分の学習をインプットする場とアウトプットする場両方を確保することで両方にいい影響を与え合っているのだ。

また、自身が楽しく学んでいるのは動物のことだけではない。外国人観光客に対する外国語応対も活動を通じて得られる貴重な体験の一つである。北海道を訪れる外国人観光客は年々増加しており円山動物園にも多くの外国人観光客が訪れている。これは自分にとって実践的に英語を使うチャンスである。また、11 月頃からは大学で習った中国語フレーズを使うことも意識している。北海道を訪れる外国人観光客の多くは中国人が占めており日によっては英語よりも中国語を使う機会のほうが多いほどだ。こうした外国語を実践的に使う機会は新渡戸カレッジ生である自分にとっては大変ありがたいものである。

円山動物園でのガイドボランティアは大学に通うだけでは得られない学びや体験を自分に与えてくれる。今後も円山動物園での活動を続けて様々な学びを来園者に与え、そこから自分も多くのものを学んでいきたい。

こども領事と学んだ3か月

C．O

活動先

（公財）札幌国際プラザ多文化交流部

活動日時

11/12/2015-1/17/2016

活動内容

まず、子どもたちと会う前に子どもとの接し方などを小学校の校長先生に学ぶ事前研修を行った。その後子どもたちとの対面式、任命式を行った。勉強会は国際プラザで行ったり、札幌市の中央図書館、山鼻中学校にお邪魔したりした。そして最後に札幌コンベンションホールにて発表を行った。

ボランティア活動を体験しての感想

今回の活動は最後に行われる発表会に向けたものであった。まずテーマ決めの段階でどのテーマにしたら発表しやすいか、調べやすいか、領事さんに質問しやすいか、など子どもたちが考えていなさそうなことを興味あることばっかり調べる子どもにさりげなくアドバイスをする。子どもたちの意見を尊重しつつ、少し誘導することが楽しくて仕方がなかった。特に子どもが「こうしたらいいんだ！」と気づいてくれた時はうれしかった。調べ学習の段階では札幌市の中央図書館で行ったため大量の本に囲まれ、子どもたちも私たちサポーターも本を読んだ。メモを取ったりするは子どもたちみんな自分でできるで、付箋を貼ったらあとで見るときに見やすいとかいろんなアドバイスをした。少し教えるだけでぐいぐい進んでいく子どもたちはすごいなと思った。発表会の準備段階ではみんなでどのように発表するか、どうまとめるか、どうしたらわかりやすいか、など子どもたちと一緒に考えた。大学で学んだプレゼンテーションの技術を教えつつみんなでよりよい発表にするため取り組んだ。発表も満点とは言えないかもしれないが素晴らしいものができた。子どもたちをサポートする側なのに一番楽しんでいたかもしれない。

ボランティア活動を通して得たもの

まず私がボランティアの授業を受けようと思ったきっかけは3つあった。1つ目は新渡戸の単位のため。2 つ目は去年ボランティアの授業をとって、ホームレスの支援のボランティアをした友達が楽しくて授業が終わっても続けていると聞いたからで、3つ目は経験のため。特にその友達に勧められたのもあり、とりあえず授業を受け始めたが、周りの学生がみんなボラン

ティア参加したことがあったり、すでにボランティアをしていたり、ボランティアを企画する方だったりとまずいろんな人に出会えて、話ができて、いろんな考え方を知れて、それだけで十分すぎるくらいだった。中高と部活しかやってこなかった私は世界が狭いほうだったので新鮮だった。その後いざ自分もボランティアを決めようとしたとき、壁にぶち当たった。特にやりたい希望などがなかったからだ。やはり自分の興味がないもしくは、やってみたいと思わないボランティアをしてもバイトと同じになると私は考えたからだ。動物園や美術館のボランティアも前々から興味があったが、部活、学科の勉強などを考えると難しくなかなか参加するボランティアを決めることができなかった。そうこうしているうちに出会ったのがこども領事だ。まず子どもが好きでさらに領事館にお邪魔でき、もしかしたら英語も使えるかもしれないし、日程もとびとびで負担も少なく、冬なので部活の試合もないということで最適な環境でのボランティアだった。活動を開始してからは毎回楽しくいくのが楽しみであった。そこでもスタッフの皆さんはトリリンガルであったり、周りの大学生サポーターが先生を目指していたり、留学を控えていたりともっと話して学びたいくらいだった。もちろん子どもにもたくさん学んだ。小学６年生が相手であったため、どういう説明までわかるのか(英語がわかるのかとか)、どういう漢字まで習っているのかなどその年にあった方法で教えるのが大変だったが、とてもためになった。一番大変だったのは子どもの話を聞くことだ。あまり話が上手でない子、話にオチがない子、自慢ばかりしてしまう子などがいた。話を聞くのは得意なほうではないので、大変だった。また話に夢中になりすぎて作業が進まないときにどういう風に作業に取り掛からせたらいいかなど最後まで試行錯誤だったし、最後になってもうまくできたわけではなかった。これからもこのような機会を利用してもっと勉強していきたいと思った。教職をとっていないし、教師になる気もあまりないが、将来子供に自分の仕事がどんなものであっても子どもとかかわらせていきたいと思った。

まとめると、様々な人から様々な情報、意見、考え方などを得ることができ、自分の考え、行動力、器の狭さ、小ささを実感できた。今回の活動を通して自分を見直せたと思う。

北大マルシェボランティア体験記

S．T

去年8月22日、23日で開催された北大マルシェ2015にイベントボランティアとして参加した。北大マルシェとは毎年北海道大学農学部前で開催されている食と農に関するイベントである。初回の開催から今回は6回目となる。マルシェ（仏: marché）とは元来「市場」を意味するが、近ごろ生産者から食材を購入する場として、全国で様々な「マルシェ」が開催されている。北大マルシェでは農学院の学生たちが主体的に企画・運営にかかわり、また数多くの教員や学生がボランティアとして参加している。（昨年までは参加者の食への意識や生産者とのつながりに焦点をあてたものでしたが、）今回の北大マルシェでは、ただ農産物購入の場のみでなく、全道各地から集まった生産者と消費者が交流する場（人をつなぐ）、そのような交流を通じて参加者が地域を知り興味をもつ場（まちをつなぐ）、そして食や地域への興味を通して参加者が明日への行動へとつなげる場(未来につなげる)とすることを目標として企画された。その背後には、近年の海外輸入農産物に圧されて低迷しつつある農業の「地産地消」について市民にも考えてもらえたいという意図もあると考えられる。北大マルシェ2015では運営スタッフが14人、ボランティアがおよそ40人参加し、37組もの農業生産者が出店し、また来場者は8000人にのぼったと推測される。イベントでは農産物やその加工品の販売だけでなく、牛乳の飲み比べや北大農場見学ツアーも活動の一環として行われた。

私がイベント中にボランティアとして参加したのは前日の設営および2日目であり、また1日目の夜の交流会にも参加し、有意義な体験を得た。設営作業は30ものテントの部品を運び、組み立てることが主で、体力的に大変だった。しかし、準備作業や交流会で他の学生ボランティア、スタッフや出店する農家さんと知り合いになることができ、その際つくったコネクションのおかげで現在酪農サークル「にとべこ」で活動でき、さらに道内の酪農家に研修に行くことが叶えられた。二日目では美深町にある「チーズ工房羊飼い」という名の羊牧場で生産されたチーズの販売補助を行った。チーズ工房羊飼いでは、牧場内で搾乳した羊乳を用いて、日本では珍しい羊のチーズ(セミハードチーズおよびウォッシュチーズ)を製造している。さらに、近隣の放牧酪農家から生産された牛乳の生乳を用いたチーズ（モッツァレラチーズ、プロヴァチーズ）も製造販売している。今回は経営者の田中孝幸さんのもとでチーズ売りのお手伝いをした。私は販売業の経験がないため、うまく作業できずに田中さんに色々とご迷惑をかけたが、チーズの売れ行きは順調で、イベント終了時間を待たずにしてチーズは早々と完売した。お客様が買ってくださったチーズを喜んで手に持つ姿は印象的だった。北大マルシェ全体も晴天のおかげもあって客足が多く、あちらこちらで熱気があふれていた。確かに北大マルシェというイベントを通じて、消費者が食を通じて生産者と交流でき、また都会の消費者がふだん身にふれる機会の少ない地方の農業生産にいっそう興味を持ってもらえたと思う。しかし、それにより市民の今後の行動変化につなげられるかどうかは疑問である。北大マルシェで消費者に地元の農産物を知ってもらうだけでなく、現在国内でどのような農業問題が生じているのか、その

ためには何を知ってもらいたいのかに関してはっきり提示する必要があると考えられる。たとえば北大農学部では地域に根付き、より持続可能な食料生産のあり方として乳牛の放牧が提案されている。その放牧牛乳の利点を知ってもらう上で、いかにして消費者の間に普及させられるかをマルシェの来場者と一緒に考えるイベントを設けると面白いと思う。

北大マルシェは現代で分離しがちの食料の生産と消費をつなぎ、普段の「食」を見直し、今後の「食」について考えるきっかけを提供する活動のあり方を示してくれた。この経験は今後も農業関連の専門に関わっていく私にとって大変有意義であった。

犬猫保護活動ボランティア体験記

S．T

私が犬猫の愛護活動、すなわち様々な理由により行き場をなくした犬猫をお世話して、新しい飼い主（里親）を探すような活動に興味をもったきっかけは、北里大学でそのような保護活動をしている学生がいるのを知ったことであった。私は北大に入学してから札幌市内の犬猫保護活動を展開している民間団体に在籍し、ボランティアとして活動していたが、2015 年度前期において他の北大生をも呼びかけて、学生の愛護活動参加を促し、また学生主体のボランティア活動が実現するように企画した。活動の際に民間団体（北海 Do ぶつ net）や酪農学園大の動物ボランティアサークル「幸せなしっぽ」のご協力を頂いた。

はじめに 5 月 17 日の石狩市で開かれたわんにゃんフェスタの際に合計 10 名以上の北大生を呼びかけ、酪農学園大の学生と一緒にイベントのボランティアスタッフとして参加した。学生ボランティアの活動内容としては、会場案内やチラシ配り、フリーマーケットのスタッフなど様々な雑務があった。参加人数が多かったため、各自がどの時間帯でどの作業をするのかを明確にするため、30 分区切りのシフト表を作成した。しかし早い段階でシフトがずれてしまい、結局各自が任意に仕事のあるブースにお手伝いに行った。イベント自体は大盛況で、多くの保護犬猫に新たな飼い主が見つかった。参加メンバーの感想としても、たくさんの来場者や遊びに来た犬猫が見られて楽しかったとあった。しかしながら実際に社会人ボランティアと学生ボランティアが別々に作業し、学生が直接犬猫の面倒を見るような作業はほとんどできなかった。

その反省を活かし、6 月の八軒の札幌動物管理センターで開かれたわんにゃんフェスタでは、もっと学生が直接犬猫に関わる仕事に携わるよう「北海 Do ぶつ net」と打ち合わせました。イベントの規模は前回より小さかったが、学生が犬のお散歩体験などの仕事に取り組んで楽しむ機会は増えた。

次に 7 月に北大理学部ローンにて、北海 Do ぶつ net と北大カフェプロジェクトが連携し、カフェを運営しながら犬猫の愛護活動も行う「北大わんにゃんカフェ」というイベント開催した。その際学生に何ができるかについて考えた結果、ほかの学生とともに犬猫関係のパネルを作成し、イベント中で展示した。その結果、多くの来場者に拝見していただき、自分たちの仕事が認められた達成感はあった。しかし、イベント中に主催者のカフェプロジェクトと社会人ボランティアの間に軋轢が生じたことがあり、学生と社会人ボランティアの間のスタンスの違いを実感させられた。

9 月の酪農学園大で開催された動物愛護フェスティバルにも北大生ボランティアとして参加し、「幸せのしっぽ」のブースのお手伝いをした。仕事の内容は専ら来場された犬の預かりであり、学生としては色んな犬の面倒を見ることができ、皆楽しめられたと思う。ただの犬の預かりなので直接動物愛護とは関わりがないが、このように学生でも直接動物のお世話ができる

ボランティア活動も有意義である。その点では、ツキネコカフェではボランティアとして直接猫のお世話ができる（しかも一年中出入り自由）ので、ぜひ他の学生を勧めたい。

学生と社会人のボランティアに対するスタンスの違いや学生ができることの限界を感じられたが、一連の活動を通して、私個人だけでなく、ほかの学生にも動物愛護活動に参与してもらえたため、有意義な活動になった。残念ながら自分が企画できなくなるので、来年度また同じような活動が実現されるかは不明だが、私は今回の経験を心に抱きながら今後動物愛護や動物福祉に従事したいと思う。全国の大学で同様な活動を続けている団体の健闘を祈る。

「見えなかったのか？見ていなかったのか？」

M.H

① 活動先、活動日時

活動先…特定非営利活動法人　TENOHASI

活動日時…2015 年 12 月 26 日 11 時～16 時、17 時～19 時、2016 年 1 月 2 日 11 時～16 時の計 12 時間行った。

② 活動内容

炊き出しは①野菜切り班②配食班③片付け班のグループに分かれて作業を行う。私は、①(12/26、1/2)②(12/28 のみ)に参加した。野菜切り班は文京区内の寺院の一角で炊き出しの準備(使用する容器の洗浄、炊飯、野菜や肉の裁断)を行った。また、配食班では実際にホームレスの人への炊き出しや後片付けを行った。

③ ボランティア活動を体験しての感想

一日目は「何よりも他のボランティアの人が怖い」という印象しか受けなかった。私はあまり料理が得意ではなく、さらに不器用であるため、調理の際人参を細くすることができず、コアメンバーのひとりに太すぎると注意された。野菜を細くするのは歯のないホームレスが丸呑みするために必要なことであると知り注意されたことには納得ができたが、この際他のメンバーの目の届かないところで私に対してのみ冷たく接するメンバーもいてかなり嫌な思いをした。また、配食班でも、ボランティアリーダーの人が私と友人に任命した仕事の出来に納得がいかないコアメンバーがおり、最終的に彼はどなりつけ私たちの仕事をとって自分ひとりでこなしてしまった。TENOHASI には長年ボランティアを続けているコアメンバーもしくは新規参加者のどちらかしかほとんどおらず、コアメンバーは仲の良い者どうしで固まっており、私たちのような新人はあまりなじむ事ができなかった。新人があまり定着しない事が TENOHASI 内部でも問題になっていると冊子に書いてあったが、新人の教育方法が確立されておらず、くわえてコアメンバーどうしで目標を共有していないため、メンバーによって新人に対する態度が大幅に異なりそれが不信につながるのではないかと考える．しかし、ここでは詳細な記述は省略するが活動内容自体は実に面白く、楽しみながら活動する事が出来たと思う。

そして、いちばん印象に残っているのは、200 人を超えるひとびとが炊き出しの列に並んでいる姿である。日常生活ではどんなに暗い場所でも行列ができれば、必ずスマートフォンやタブレット端末によって顔が仄明るく照らされる人がいる。しかし、行列には誰ひとりとしてそのような者を持ちながら待つ人はおらず、ただひたすらじっと待っているだけであった。私が今、仮に生活に困窮したとすると、どうしたら良いのかを知る為に、まずスマートフォンで情報を調べると思う。しかし、スマートフォンを持てないほど困窮していたらどうなるかは想像もつかない。行政が生活困窮者を救済するしくみを作っても、それを知らせる手だてが無いならばそれは全く機能しないだろう。ボランティア研究会のＳさんがくださった、「路上生活脱出

ガイド」(ビッグイシュー基金)には、これまで私の知らなかった様々な救済制度や支援が掲載されていたが、このような冊子を作成し実地で配布することは、自力で情報にたどり着くことができない人々により多くのチャンスを与えることができるのだと思った。

④ 新しい発見、学び、役に立つこと

学部柄、日頃から無意識のうちに人の歯に注目してしまうのだが、ホームレスの人の口腔状態は総じて悪いことが観察された。身につけている衣服は、衣類配布などによって一見して一般の人と変わらないような清潔な服装をしている人も多いが、口腔状態は一般の人と大きく異なっていた。これには歯を磨く環境(設備、場所、器具、時間、金銭的余裕)に乏しい事と不規則な生活習慣が大きく関わっていると考えられる。衣類配布の際に、ボランティアスタッフに声をかければ、衣類だけでなく髭剃りや石けん、歯ブラシなどといったホテルのアメニティーグッズをもらうことができるが、ホテルで入手できる歯ブラシは歯科用とはもちろん、一般用の歯ブラシとも材質も形状も大きく異なり歯を適切に磨く事は難しい。歯周疾患(歯周病)は、糖尿病、細菌性心疾患、誤嚥性肺炎などの全身疾患と大きく関わっており、また、齲蝕(虫歯)や歯周疾患による歯の喪失はその機能(咀嚼、発音と会話、表情と審美性)を失うだけではなく、見た目の印象を左右しその人の社会復帰までをも妨げてしまうのではないかと考えた。歯科疾患は直ちには人の生命を脅かさないため、路上生活者支援でも優先順位が低くなってしまうが、歯科と貧困には密接な関係があり、(東京２３区では小学校低学年の齲蝕率と課税額には負の相関関係がある。) 支援をする側はその当事者に治療を施すだけではなく、予防や啓発などの先を見据えた行動をする事が、貧困への長期的な解決につながるのだと思う。

今までは、ホームレスの人を興味本位で観察する事は失礼だと思い、必要以上に目を背けてきたところがあるが、それによって知らないことも多かった。今回のボランティアでは、実際に話したり、同じ炊き出しを食べたり、少しだけでもホームレスの人と関わることができた。医療はすべての人が平等に受けられるべきあり、ホームレスの人々も社会の一員であるから、私は歯科医師として他の患者さんと同様に接したいと思うし、今回のボランティアを通じてそのような態度を身につける心構えができたと思う。

ネパールでの冒険で得た学び

K.K

①活動先、活動日時について

活動先はネパールで、２月２３日から３月１日まで CEC ジャパンネットワークが斡旋している「ネパール震災復興支援ボランティア」に参加した。

②活動内容

主な活動内容は２つで、復興支援活動と現地の子供たちへ日本文化の紹介を行った。

復興支援活動は、私がホームスティしていたネパールでの４大都市のひとつ、パタンからバスで２０～３０分ほど走ったブンガマティという村で行った。ブンガマティは震災復興がまだ進んでおらず、壊れてしまって人が住めなくなった住宅がそのまま放置されていた。私たちがそこで行ったのは、ブンガマティの震災復興支援を促進する NPO と協力して、その村で最も貧しく住宅の再建は自力では難しいと判断された男性の自宅再建支援作業である。まず震災によって崩壊し住むことができなくなった男性の自宅を崩し、発生する瓦礫を、台車を用いて撤去し再建する為のスペースを確保する作業と、再利用できるレンガの仕分け作業を行った。この復興支援活動にはカトマンズに住む同世代のネパール人日本語学習者が３～５人協力してくれた。また、その村の若者も２～３人力を貸してくれた。さらに、私たちが復興支援活動をしている傍らで現地の方が他の住宅の瓦礫を撤去していたのでその仕事に従事する女性大工の方々も台車に不慣れな私たち日本人ボランティアに力を貸してくれることもあった。このように多くのネパール人と協力しながら復興支援活動は行った。日本語学習者以外は簡単な英語とネパール語、ネワール語（方言）を話すのでコミュニケーションを取るのは難しかったが、ボディラングエージや覚えた簡単なネパール語でコミュニケーションを行い、台車をバケツリレーする形で協力しながら活動を行った。

同じくブンガマティにある小学校で日本文化を教える活動も行った。１クラス３０人ほどの生徒がおり、学年もバラバラのようであった。この活動は日本人ボランティアグループと上記した５人のネパール人日本語学習者とを大きく２つにわけて、室内で教えるグループと室外で教えるグループで分かれて行った。私は室内で教えるグループになり、折り紙を教えた。１クラス約３０分しか時間がなかったのだが初回は鶴を教えようとして失敗。２回目からは私が調べた桜の折り方を教えた。この活動は合計３回行った。折り紙を教えている最中は生徒みんなが興味をもって食いつくように聞いてくれたので、とても面白かった。英語で伝わらない部分は日本語学習者にネパール語で伝えてもらった。室外のグループはろうそく鬼を教えたと言っていた。またネパールの祝日にブンガマティの広場で子供たちにネパールの遊びと日本の遊びを教えあった。私たちは”だるまさんがころんだ”を教えて、何度も一緒にやった。ネパールの子どもたちには計４つのゲームを教えてもらった。

③ボランティア活動を体験しての感想

ボランティアは楽じゃないなということと、楽しいなと思った。実際にボランティアに行く前は、私ができることがあるなら力になりたいという気持ちだったのだが、実際にネパールに到着し活動をしてみるとネパールの方のことを考える余裕がいつの間にかなくなっていた。空気が悪いので外では常にマスクを着用した状態で、瓦礫を台車で運搬する作業はとてもつらく、しんどいものであった。復興支援の協力をする男性とも言語の問題でコミュニケーションをとれず、この活動の意味ややりがいが現地に行ってから見えなくなった。このように過ごした最初２日間の活動は精神的にも身体的に非常につらかった。私が出発前に想像していたよりも空気汚染や標高の高さなど活動における問題は多く、実際に活動するというのは楽じゃないなと思った。

しかし、３日目に復興支援活動のあとにこどもたちとの交流で教えたことに対して“面白い”“きれい”“楽しい”という反応が返ってきてとても楽しく面白かった。それから、ネパールまで来ているのだからと、復興支援活動で達成したい目的や自分のやりがいを考え直してみた。私はこの時点での目的をネパールの方との交流で違う文化を楽しんでもらうという目的にして、積極的に協力して活動を行った。そうすると、あれだけつらい作業が楽しいものと変わっていった。しかし、ボランティアが５日間終わる時点まで、正直のところボランティアで達成したい目的や私たちの行動に意味はあったのか答えはわからずにおわった。

④ボランティア活動をしたあなたはどのような新しい発見や学びがありましたか。また、あなた自身にとって何か役に立つことはありましたか。

ボランティアは結果ではなくその行動に意味があると気づいた。上記したように、私はボランティア期間中ボランティアの意味がわからなくなっていた。しかし、最終日に訪れたバクタプルという世界遺産がある町で一本奥に入ると瓦礫が一面に積み上げられているのに、誰一人としてそれをどうにかしようとするひとがいないというのを見て、違和感をもった。ブンガマティではあんなに和やかに多くの人が働いていたのに、ここではなぜ誰も住宅再建のためにうごいていないのだろうと思った。そこで考えたのは、私たちのボランティアの意味は現地のひとを励ますというところにあるのではないかということだ。私たちがブンガマティで活動しているときはなにか日本人がやっているぞということで、わきで私たちを見ているだけのネパールの方がたくさんいた。そして知らないうちにボランティア最終日には多くの子供たちと現地の方が力を貸してくれたので私たちのやることがないほどだった。つまり、私たち日本人がこの状況をどうにかしようとしている姿勢に「私たちもやろう」と思ってもらい、現地の方の手で復興が進むということが最も理想的で私たちが行なった復興支援ボランティアはそこに意味があったのではないかと思った。私たちが瓦礫を撤去したという結果よりも、私たちが瓦礫を撤去しているという行動に意味があるのかなと思った。

また、ネパールでは日本とはすべてが違う生活を送っていたので、そこから学び日本に帰ってきた今でも私の中に根付く考えがある。それは、「お金について」と「生きることについて」の二つの考えである。まずお金についてだが、ネパールでは１か月の生活費が１万円で済んでしまう。「年に２回しか服を買わない」「たべものを残さない」など、お金を浪費しない理由がたくさんあった。そうした世界を体感してみると、たしかに無駄に捨て無駄に買っているなと思い、欲しいか否かということよりも必要か否かで考えるようになった。次に、生きることについてだが、ここは現時点ではあまりうまく言葉にできない。ネパールでは生命にかかわる危険が本当にすぐ近くにあって、常に気をはっていないといけなかった。しかし、日本でいるよりも生きているという感じがした。また、人間関係という点でもネパールでは人は自由気ままに生活する。精神が自由だなと思った。生活には物理的制限がかかるが、精神面では束縛はない。そこに幸せにいきるヒントがあるような気がしている。

アンケートの結果

１． 事前アンケート（履修参加登録時）

ボランティア科目を運営していく上で、ボランティア先の確保が不可欠である。ボランティア先は、ボランティアを開始する前に準備しておかなければならない。どのようなボランティア先をどれぐらい確保すべきかについて事前に把握する必要がある。そのためには、受講希望者数と希望のボランティア活動内容、時期などを事前に把握する必要がある。そこで、2015 年４月 21 日（金）～４月 27 日（月）までの１週間、web アンケートを実施した。その概要と結果は以下のとおりである。

事前アンケートの概要

項目	内容
実施日	2015 年４月 21 日（火）～４月 27 日（月）までの１週間
目　的	受講者数の傾向と人数を事前に把握し、体験実習受入先確保のための準備をする。
対　象	履修参加登録した学生
質問項目	ボランティア体験の有無 活動内容および時期についての希望 参加先の紹介方法についての希望 その他の希望
方　法	履修参加登録期間中に web アンケートの URL を掲示板に掲示し、web 上からエクセルでダウンロードして回収した。

事前アンケートの結果の概要

アンケートの結果、20 名が履修参加登録をし、このうち約半数がボランティア経験を有していた（表 1）。「これまでの活動内容」は、高齢者福祉、子ども福祉、まちづくり、国際交流、募金活動、被災地支援、実習など、多岐にわたっていた（表２）。ボランティア活動の紹介方法は、「①授業で提供されたリストから選びたい」が 16 名、「自分で探したい」が３名で、すでに活動しているボランティア活動を体験実習として認めてもらいたいという学生は１名だった（表３）。

「①授業で提供されたリストから選びたい」と回答した 16 名が希望する活動内容は、表４−１～表４−３のとおりである。第一希望で最も多かったのは、「博物館・美術館・動物園・図書館等」の６名だったが、「留学中や海外でのボランティア」の５名と「留学正支援等」３名を合わせると８名で、留学に関係したボランティア活動を希望する学生が最も多かった（表４−１）。第二希望で最も多かったのは、「博物館・美術館・動物園・図書館等」と「児童福祉施設等」のそれぞれ６名で、一般の人々や子どもとの交流が必要とされるボランティアに集中していた。（表４−２）。第三希望で最も多かったのは、「留学生支援等」５名と「留学中や海外でのボランティア」４名で、国際交流が必要とされるボランティアに集中していた（表４−３）。一方、「高齢者福祉施設等」や「障がい者福祉施設等」でのボランティア活動を希望する学生は、全体をとおして少ない傾向にあることがわかった。

「②自分で探したい」と回答した学生が希望する活動内容は、「北海道の労働と福祉を考える会」（ホームレス支援）、「国際ボランティア」、「性的障がい者の支援」だった（表５）。

このうち、前２者は、これまで本科目で紹介した活動内容であったが、後者については受入先を開拓する必要があった。「③今、自分がしている活動を体験として認めてもらいたい」と回答した学生が希望する活動内容は、「円山動物園でのガイドボランティア」だった。

ボランティア活動の時期については、第一希望から第三希望まで回答をもとめた。結果は、表７～９のとおりである。第一希望で最も多かったのは「夏休み中」の 11 名だった（表７）。第二希望で最も多かったのは「春休み中」の 11 名だった（表８）。第三希望で最も多かったのは「無回答」15 名で、大半の学生が、夏期または春期休業中に活動をすることを希望していた（表９）。

事前アンケートの集計結果

	人数
回答者	20

表１

ボランティア活動体験の有無	人数	%
ある	9	45
ない	11	55
合　計	20	100

表２

ボランティア活動体験の内容　（「ある」のみ回答）
老人ホーム、ジュニアリーダー、保育園での実習、道路脇の花壇に花を植える活動、東北の被災地で畑の整備、フランスの教育農園で小屋の建築、大土町（重要伝統建築物群保存地区）で雪かき、被災地へ本を送る活動、国際交流活動、募金活動、清掃活動、植樹活動、YMCA という団体で、子供たちと一緒にアウトドア活動をしました

表３　ボランティア活動の紹介方法について

紹介方法	人数	%
①授業で提供されたリストから選びたい	16	80
②自分で探したい	3	15
③今、自分がしている活動を体験として認めてもらいたい	1	5

表４－１　希望する活動内容

「①授業で提供されたリストから選びたい」と答えた人の希望		
第１希望	人数	%
博物館・美術館・動物園・図書館等	6	37.5
児童福祉施設等	0	0
留学中や海外でのボランティア	5	31.3
留学生支援等	3	18.8
障がい者福祉施設等	1	6.3
高齢者福祉施設等	1	6.3
合　計	16	100

表４−２

「①授業で提供されたリストから選びたい」と答えた人の希望		
第２希望	人数	%
博物館・美術館・動物園・図書館等	6	37.5
児童福祉施設等	6	37.5
留学中や海外でのボランティア	2	12.5
留学生支援等	2	12.5
障がい者福祉施設等	0	0
高齢者福祉施設等	0	0
合　計	16	100

表４−３

「①授業で提供されたリストから選びたい」と答えた人の希望		
第３希望	人数	%
博物館・美術館・動物園・図書館等	0	0
児童福祉施設等	2	12.5
留学中や海外でのボランティア	4	25.0
留学生支援等	5	31.3
障がい者福祉施設等	1	6.3
高齢者福祉施設等	2	12.5
無回答	2	12.5
合　計	16	100

表５

「②自分で探したい」と答えた人の希望
北海道の労働と福祉を考える会、国際ボランティア、性的障がい者の支援

表６

「③今、自分がしている活動を体験として認めてもらいたい」と答えた人の希望
円山動物園でのガイドボランティア

表７

ボランティア活動の時期について　第１希望	人数	%
①夏休み中	11	55
②留学生サポーターの募集時期	1	5
③春休み中	3	15
④その他	5	25
合　計	20	100

表８

ボランティア活動の時期について　第２希望	人数	%
①夏休み中	1	5
②留学生サポーターの募集時期	2	10
③春休み中	11	55
④その他	6	30
合　計	20	100

表９

ボランティア活動の時期について　第３希望	人数	%
①夏休み中	2	10
②留学生サポーターの募集時期	0	0
③春休み中	3	15
④その他	0	0
無回答	15	75
合　計	20	100

表 10.　その他希望すること

自由記述（20 名中 3 名回答）
夏から留学するので１学期中に終えたいです。
現在私は陸上競技部に所属しており、試合の際に補助員といって試合の補助(審判の補助)を行っているのだが、それはボランティアの活動に認められるのか否かが知りたいです。補助員の活動は、昼食は出ますが、もちろん報酬なしです。
質問です！海外協力系のインターンシップに応募しているのですが、もし参加できることになったら、ボランティアとして認可されますか？？

２．中間アンケート

ボランティア科目の学習効果をどのように測定すべきかについての研究は残念ながらまだ進んでいない。そのためには、何をもってボランティア学習の効果を測定すべきか、そのための指標について検討する必要がある。そこで、本科目では、10 月 16 日（金）ワークショップ(授業内)にて、予備調査として試験的に中間アンケートを実施した。このアンケートでは、ボランティア活動が学生にどのような影響を与えたのかについて調査した。そこで、以下の４項目について質問した。

10 月は、夏期休業を終え、2 学期開始直後である。この時期には、学生たちは、ボランティアの事前研修（講義と個別面談）およびボランティア先のマッチングを経て、活動を開始または活動中にあたる時期であり、まだ実習を開始していない者もいた。この時期にこのアンケートを実施した理由は、体験報告会が開始される前の実習期間中に、学生たちがどのようなことを思い、考えながらボランティア活動に参加しているのかについて観察する必要があると考えたためである。

	内容	項目
設問１	あなたは今回のボランティア活動の体験を通じて自分自身が変わったり、成長したという実感を持つことができましたか。それはどういうことですか。	自分自身の変化や成長の実感について
設問２	ボランティア活動を体験する前に、あなたはどんなことを学びたいト考えていましたか。当初のあなたの思いを実現することができましたか。	ボランティア学習の目標の達成感について
設問３	今回のボランティア体験でもっとも想定しなかったことはどんなことでしたか。	想定外の出来事の内容
設問４	ボランティア活動に取り組むにあたってあなたは特に準備したことはありましたか。 (1) それはどんなことでしたか。 (2) 今回は準備しなかったけれど、準備しておけば(学習しておけば) 良かったことはありましたか。それはどんなことでしたか。	事前準備の有無、事前準備の内容、必要とされる事前準備の内容について

中間アンケートの概要

項目	内容
実施日	10 月 16 日（金）ワークショップ(授業内)
目　的	ボランティア体験が学生に与えた影響について把握すること。
対　象	２回目のふりかえり会に出席した学生
質問項目	以下の４項目
方　法	授業中に配付し、その場で回収した。

中間アンケートの結果の概要

中間アンケートの結果は以下のとおりである。中間アンケートの対象者は９名だった。このうち、ボランティア体験実習を開始していないものは１名だった。

設問１では、自分自身の変化や成長の実感について質問した。その結果、1.ボランティアとは何かという理解や意味づけ、２.自分自身が現在抱える課題克服とボランティアの関係、３.ボランティアで取り扱った事柄に対する認識の変化、４.学生だけでも大きなことができるという自信、５.社会人としての礼儀やマナー、６.他者とのコミュニケーション能力の向上、７.自分自身が本当にしたいことと幸福の追求の関係についてあげられた。これらの記述から、学生たちは、ボランティア体験を通じて、課題克服力、新しい認識の受入れ（柔軟性）、チャレンジ精神、社会人としての役割期待への対応力、人間関係構築力、社会貢献する自己と幸福を追求する自己の間で葛藤する自己を客観視する力などを意識していたことがわかった。

設問２では、ボランティア学習の目標の達成感について質問した。その結果、１.ボランティアを通じたキャリア形成、２.ボランティア対象者への理解と多様な価値観の受容、３.ボランティアの意義、４.ボランティアを通じた自己変革、５.ボランティアを必要とする現場の理解と知識の重要性、６.他のボランティア参加者との交流、７.コミュニケーション力の向上、８.ボランティア活動を運営する側の人々やボランティアの受入先の人々との交流などが挙げられた。これらの記述から、学生たちは、ボランティア活動を始める前から、キャリアの自己形成、他者理解、自己変革、能力向上、社会貢献のあり方に対する理解など様々な目標をもってボランティア活動に参加しようとしていたことがわかった。

設問３では、想定外の出来事の内容について質問した。その結果、想定外だったことは、１.ボランティアの対象者に対するイメージと現実が違っていたこと、２.ボランティアに求められる主体性や自発性は必ずしも必要とされないこと、３.ボランティア活動を通じて質の良い商品やその提供者との出会いがあったこと、４.ボランティアとして社会の役に立てなければならないという考え方をもつ自己と対峙したこと、５.ボランティアを通じて、自らの能力が活かされたこと、６.多様な価値観をもつボランティアが存在すること、７.海外ボランティアに参加していながら日本語しか話さない日本人ボランティアがいたことなどが挙げられた。これらの記述から、学生たちにとって「想定外の出来事」とは、ボランティア対象者や「ボランティアであること」に対する自己の先入見の気づき、ボランティア参加者の多様性の発見（他のボランティア参加者に対する不満も含む）など、自己反省を迫られるようなネガティブ体験だけでなく、ボランティア活動を通じた偶然の出会いや自己の能力を発揮する機会が偶然得られたことに対するポジティブで楽しい体験も含まれていた。

設問４では、事前準備の有無、事前準備の内容、必要とされる事前準備の内容について質問した。その結果、「事前に準備したこと」は、ボランティア活動で必要とされる基本的な知識に関する情報収集が主なものだった。「事前に準備しておくべきだったこと」は、ボランティア活動に必要とされる基本的知識（言語、歴史、世界情勢、動物の名前など）だけでなく、一緒にボランティア活動をする人との人間関係づくりの方法や役割分担の確認も含まれていた。

上記のことから、中間アンケートでは、わずか９名の回答ではあったが、学生たちは、様々な目標を抱き、想定外の出来事や困難から多種多様な気づきを体験していた。総じて、ボランティア活動は、学生たちにとっていい意味でも悪い意味でも、深い自己理解や新しい自己との出会いをする場となっていたと言える。

中間アンケートの集計結果

	人数
出席者	9
回答者	9

Q1. あなたは今回のボランティア活動の体験を通じて自分自身が変わったり、成長したという実感を持つことができましたか。それはどういうことですか。

回答(9 人中 9 人)
まだ一度だけしかボランティアに参加していないので、この質問には答えられません。
ボランティアに対する感覚。　学び?社会こんな?趣味？　自分はどうして博物館に行くのかおもしろい？勉強？　人との会話：「そこの人」として
ボランティアというものがどういうものか理解していない。まず一回やってみることから始めたいと思う。
人見知りがほんの少し解消されたと思いたい。
食に対する認識が変わった（かも）。「食」がより身近になった。学生主体でも大規模なイベントを運営していけることができた。
恥じを捨てようと思った。
ボランティアとお客さんの、大人同士のやり取りに日々接することによって、言葉遣いや話し方、他者へ敬意を払ったり、礼儀の示し方、社会人としての振る舞い方を学べた。施設の人間として敬意をもって丁寧に人と話すことができるようになった。
自分の伝えたいことを聞き手に適切に伝えるにはどうすればいいのか。聞き手に応じて伝える情報、話し方、言葉も変れる。
I learned　the compovrance　to do what you really want to do and persue your happiness

Q2. ボランティア活動を体験する前に、あなたはどんなことを学びたいと考えていましたか。当初のあなたの思いを実現することができましたか。

回答(9 人中 9 人)
私は将来、歯科医師として様々な背景を持った患者さんに接することになります。どんな背景や考えを持った人々に対しても、平等に接せられるようになりたいのですが、自身が人見知りをよくするため、なかなか実現をすることが難しいです。私はボランティアを通じて、多くの価値観に触れてみたいですし、自分が今持っているスキルを役に立てられたらよいと思いました。
なぜ人は文化に興味をもつか。博物館に来る人はどんな人か。ボランティアって何。
ボランティアの意義などについて考える機会を持ちたい。

自分から話さなければいけない、動かなければいけないところへ飛び込むことで、変わりたいと思った。活動時も黙ってしまうこと、言うべきことをのみこんでしまうことがあった。
地域の農家での生産現場、流通現場について学ぶこと。ある程度理解が深められた。まだまだ全然知らないなと実感。
自然の中で働く方法を見出す。まぁまぁ。
人生経験豊富なボランティアの方から、社会や人生に対する貴重なお話を聞きたい思い、実際色々な方と触れ合えることができた。
動物の魅力を来園者に伝えることを通じてよりよい人とのコミュニケーションの方法を学びたいと考えていた。
wanted to learn more about different values, especially from other farmers and NGO members.

Q3. 今回のボランティア体験でもっとも想定しなかったことはどんなことでしたか。

回答（9人中8人）
初回から予想外の出来事だらけでした。学習障害や発達障害を持った子どもが多く。たとえば会話の途中で突然始めたり、文字を形としてしか認識しておらず、答えをお絵かきしていたりと、私の考える普通とは異なった行動をしている子どもばかりで驚きました。
店となにちがう
主体的に動けなくても何とかなってしまうところがあったこと。
羊のチーズの農家が出店していること。羊のチーズがマイルドでおいしかったこと。
人の役に立たないのは辛い。日本人がしみついている。
以外と英語を使う機会が多かった。
動物ガイドを申し込んだ人が動物に興味があるとは限らないこと。
there was a party of Japanese volunteers in which Japanese was a common language.

Q４. ボランティア活動に取り組むにあたってあなたは特に準備したことはありましたか。

⑴ それはどんなことでしたか。

⑵ 今回は準備しなかったけれど、準備しておけば（学習しておけば）良かったことはありましたか。それはどんなことでしたか。

回答（9人中8人）
⑵“小学校の勉強だったら、教えるのもどうにかなるだろう”と、心の中でどこかなめた部分があって、予習を怠ったために、自分自身もわからないことがあり、反省しています。
⑵1日目などでボランティアの役割分担について確認しておけばよかった。

(1)ニュージーランドの外来種について少しだけ調べた。 (2)ボランティアについては特になかった。メンバーと話せるように話のネタを準備しておいても良かったかもしれない。
(2)酪農やその他の農業に関する基礎的な知識が足りなかった。
(1)くつ、服 (2)世界状勢
(1)村を紹介するパンフレットを頂き、それを読み込んでからボランティアに望んだ。 (2)もう少し、北海道の開拓時代について勉強しておけばよかった。
(1)担当動物の名前を覚えること。 (2)もっと外国語をやっておけばよかったと思った。思いの外、英語を使うことが多い。
(1)local langvage　I need but it was not enongh (2) langvage+convage ok with other volunteers but not with local people who don't speak English

感想

回答(9 人中 1 人)
みんながボランティアをして、何を思い、何を考えたのかシェアすることができて興味深かったです。日本人論で盛り上がったが、あまりネガティブになるのはよくないと思いました。

３． 事後アンケート

上述したとおり、中間アンケートでは、学生たちは、様々な学習目標を持って、ボランティア活動に参加し、想定外の出来事に直面しながらも日々成長していく姿が垣間見られた。事後アンケートでは、ボランティア体験学習の学習効果について把握するため、まとめの講義終了後、この段階ですでにボランティア体験実習および事後研修を終えた８名を対象に実施した。事後アンケートの概要は以下のとおりである。　設問は、「あなたは、ボランティア活動を体験して、次の点についてどれくらい共感できますか。」とし、以下の８項目についてその共感の程度について回答してもらった。回答は、４～0の５件法を用いた。

事後アンケートの概要

項目	内容
実施日	１月 29 日（金）まとめの講義（授業内）
目　的	ボランティア体験の学習効果について把握すること。
対　象	最終回のまとめの講義に出席した学生
質問項目	以下の８項目
方　法	授業終了後に配付し、その場で回収した。

質問内容

	共感できること（質問内容）	共感内容
Q1	無理をしないで、自然に楽しむ	自己調整力
Q2.	とにかく一度やってみる	チャレンジ精神
Q3	やる以上は責任を持つ	責任感
Q4.	人とのつながりを大切にする	コミュニケーション力
Q5.	自分にはできること、できないことがある	自己理解
Q6	できごとの意味を考える	状況把握
Q7	少しずつ学ぶ	協調性
Q8.	やめて、次に進むことも大切である	柔軟性

事後アンケートの結果の概要

図１は表１の結果をグラフにして見やすくしたものである。図１のとおり、上記の８項目のうち、今回のボランティア活動を通じて、学生たちが最も強く共感した項目の第１位は、「Q4. 人とのつながりを大切にする」（コミュニケーション力）であり、８名中８名全員が４と回答した。第２位は、「Q3. やる以上は責任を持つ」（責任感）で８名中６名が「４」、２名が「３」と回答した。第３位は、「Q2. とにかく一度やってみる」（チャレンジ精神）と「Q1. 無理をしないで、自然に楽しむ」（自己調整力）で、いずれも８名中５名が「４」、３名が「３」と回答した。第４位は、

「Q6. できごとの意味を考える」（状況把握）と「Q5. 自分にはできること、できないことがある」（自己理解）で、８名中４名が「４」、３名が「３」と回答した。第５位は、「Q7. 少しずつ学ぶ」（協調性）で、第６位が「Q8. やめて、次に進むことも大切である」（柔軟性）だった。

学生たちが、共感の程度を「４」または「３」と回答した項目は、コミュニケーション力、責任感、チャレンジ精神の３項目であり、これらについて強く共感していたことがわかった。また、自己調整力、状況把握、自己理解の３項目についても、「４」または「３」と回答した学生が８名中７名いたことから、これらについても共感していたことがわかった。

他方、柔軟性については、３または２と回答した人が８名中６名で、チャレンジ精神と責任感に対する共感が強い反面、協調性と柔軟性には共感の程度が低い傾向にあるのではないかと考えられる。このことは、学生たちの自由記述回答からも見てとれる。共感の程度が最下位であった「Q8. やめて、次に進むことも大切である」（柔軟性）について、「２」以下の回答者は４名いた。そのうちの１名は、「「やる以上は活動に責任を持つこと」と「とにかく一度やってみること」「やめて次に進むことも大切である」ことのバランスが難しいを思っています」と述べていた。また、第５位であった「Q7. 少しずつ学ぶ」（協調性）で「２」以下の回答者は２名だった。そのうちの１名は、「せっかちなので目先の評価が気になってしまって、他のボランティアの人や周囲の人と意見が食い違うことが多かったです。」と述べていた。これらの記述から、責任感と柔軟性、チャレンジ精神と協調性のバランスをとることが難しい学生もいることがわかった。今後は、この点について学生たちと話し合う必要があるだろう。

事後アンケートの集計結果

事後アンケートの結果

	人数
出席者	8
回答者	8

図１

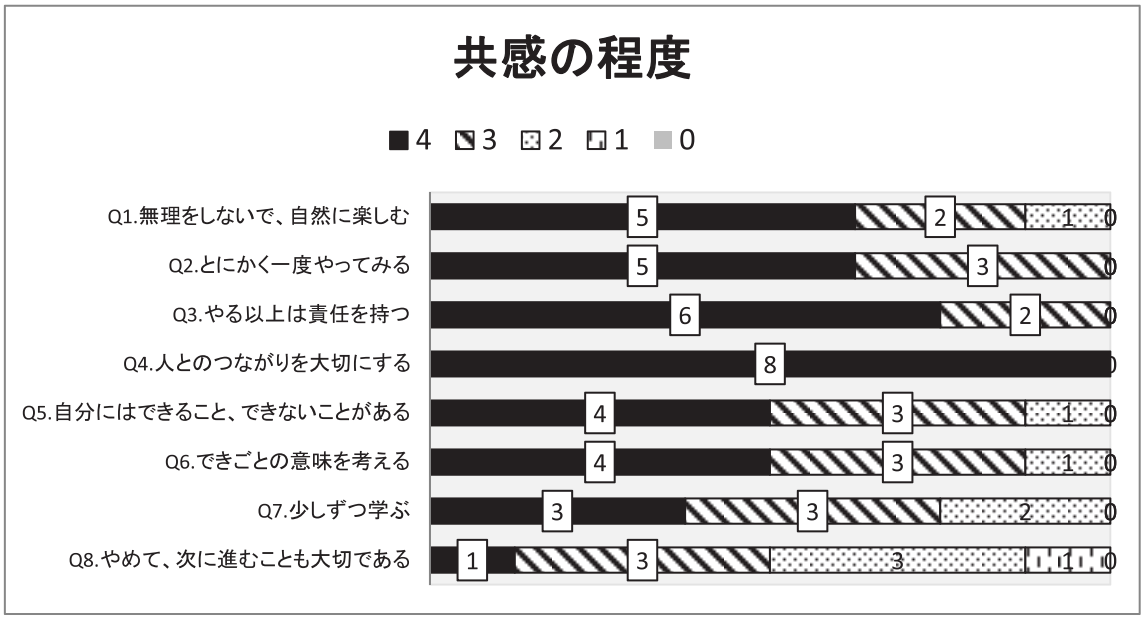


表１.

あなたは、ボランティア活動を体験して、次の点についてどれくらい共感できますか。	4	3	2	1	0
Q1.無理をしないで、自然に楽しむ	5	2	1	0	0
Q2.とにかく一度やってみる	5	3	0	0	0
Q3.やる以上は責任を持つ	6	2	0	0	0
Q4.人とのつながりを大切にする	8	0	0	0	0
Q5.自分にはできること、できないことがある	4	3	1	0	0
Q6.できごとの意味を考える	4	3	1	0	0
Q7.少しずつ学ぶ	3	3	2	0	0
Q8.やめて、次に進むことも大切である	1	3	3	1	0

設問２.　特に感じたことがあったら、具体的に書いてください。（自由記述）

Ｑ１. 無理をしないで、自然に楽しむ。

回答が「３」以上の回答者（７名中、６名回答）
・　続けるには。 ・　学業を優先しながらボランティアを継続的に行うこと。 ・　このことの重要性はわかりますが、３と少々相反する考えのようにも見えました。 ・　子どもと一緒に同じ目線で。 ・　楽しいからこそ続けられる ・　できない事だらけで（まなトピアでは勉強を教える、ホームレス支援ならば野菜の切り方など）自分自身について嫌に思う事もあり、自分で納得できたこともあるけれど、自分の中で昇華できなかったことも多かったです。　Ｑ５も同回答
回答が「２」以下の回答者（１名中、１名回答）
・　いつも楽しんでいられるわけではないと思うので、「無理をしないで自然に楽しむ」は常に可能な事ではないと感じました。

Ｑ２．とにかく一度やってみる。

回答が「３」以上の回答者（８名中、４名回答）
・　動くことに意味ありげ。 ・　やってみなければ実感できないこともある。 ・　やりたいことは我慢しない。 ・　「できないことがあってもそれでいいのかな」と今も思っています。
回答が「２」以下の回答者（０名）
該当なし

Ｑ３．やる以上は責任を持つ。

回答が「３」以上の回答者（８名中、５名回答）
・　当然。 ・　動物や食べ物を対象にしたボランティアでは特に責任が重い。 ・　責任感につぶされては意味がない。 ・　草や木など、一度切ったり抜いたりしたら戻せないので、責任は重大だったと感じました。 ・　歯学部では「プロフェッショナリズム」を常に意識した行動をしなさいと言われていて、本来の意味とは違いますが、プライドを持って責任を持って取り組めたと思います。
回答が「２」以下の回答者（０名）
該当なし

Ｑ４．人とのつながりを大切にする

回答が「３」以上の回答者（８名中、５名回答）
・　一番楽しさを感じるのは人といる時だから。 ・　ボランティア活動を通じていろんな人のコネクションを作り今後の自分の人生に活かせる。 ・　先輩ガイドの方の話を参考にガイドするととても喜ばれる。 ・　特に他のメンバーとしっかり人間関係を築かないと楽しめない。 ・　人とのつながりを大切にすることは出来たと思います。将来歯科医師として人々に平等に接するためにはどうしたらよいのか、という事に私なりの答えが見つかりました。
回答が「２」以下の回答者（０名）
該当なし

Ｑ５．自分にはできること、できないことがある。

回答が「３」以上の回答者（７名中、４名回答）
・　とにかく一度やってみることによって、できないことがあってもやる意義はある。 ・　学生であることでいろんな制約が存在する。 ・　専門知識、技術もない、時間も限られている。

・　言葉の壁があったこともあり、できないことが多かったのですが、リーダーに残念そうな顔をされた仕事を、2回目は改善点を考えて行動したら喜んでもらえたのが印象に残っています。
回答が「2」以下の回答者（1名）
なし

Q6．できごとの意味を考える。

回答が「3」以上の回答者（7名中、4名回答）
・　皆の活動を聞いて思いがけないところに障害があったりする。 ・　今回のように社会的包摂について考えることが有意義である。 ・　自分が何でやっているのかわからなくなる。 ・　考え過ぎな事もありますが、常に出来事の意味を考えることは大切だと思いました。
回答が「2」以下の回答者（1名）
なし

Q7．少しずつ学ぶ。

回答が「3」以上の回答者（6名中、3名回答）
・　自分に“合っているか”のインスピレーションは大事。 ・　一度の活動だけではすぐに身に付かないことが多い。 ・　海外の人に対して少しずつ話ができるようになった。
回答が「2」以下の回答者（2名中、1名回答）
・　せっかちなので目先の評価が気になってしまって、他のボランティアの人や周囲の人と意見が食い違うことが多かったです。

Q8．やめて、次に進むことも大切である。

回答が「3」以上の回答者（4名中、3名回答）
・　停滞するより動き続けたい。 ・　無理して続ける必要がない。 ・　ボランティアは特定の個人に期待されているものではない。
回答が「2」以下の回答者（4名中、2名回答）
・　「次に進むの」意味がざっくりしている為、判断が難しいように感じました。 ・　「やる以上は活動に責任を持つこと」と「とにかく一度やってみること」「やめて次に進むことも大切である」ことのバランスが難しいを思っています（少しでも嫌な気持ちがあったらやめていいのか、それは嫌な事から逃げることではないのか、と悩みました）。

資料

１．体験報告会の模様

第１回体験報告会

実施日：2015 年 10 月 2 日（金）18：15～19：45　　情報教育館４階共用多目的教室（2）

報告者	参加先	報告タイトル（エントリー順）
S．T	北海道大学農学部 北大マルシェ	「食でつなぐ地域と人」
S.Y	Conservation Volunteers	「ニュージーランドの公園での自然保護活動」
M.O	Stadtforest Jena, Fuchsturmgesellschaft	「国際×環境保護　ボランティア@ドイツ」





事前打合せの模様

第２回体験報告会

実施日：2015 年 11 月 13 日（金）18：15～19：45　　情報教育館４階共用多目的室（2）

報告者	参加先	報告タイトル（エントリー順）
Y．T	北海道開拓の村	「北海道の歴史と新たな気づき」
J．K	円山動物園	「円山動物園ガイドから学んだこと」
K．F	ブジーグ農場 （フランス）	Workcamp　à la ferme de la Bonzlgve （ブジーグ農場でのワークキャンプ）
S．S	北海道魅力市実行委員会	「北海道地域魅力－－ ボランティアを通じて知った過疎地域のこと」







※第２回体験報告会は、北図書館の協力により、北図書館２階セミナールームにて行いました。
当日の模様は、北図書館のホームページでも紹介されました。

第３回体験報告会

実施日：2016 年 1 月 8 日（金）18：15〜19：45　北図書館２階セミナールーム

報告者	参加先	報告タイトル（エントリー順）
M. H	さっぽろ・まなトピア	「教えるつもりだったのに…」
S．T	NPO 法人ツキネコ北海道	「学生@動物保護活動」



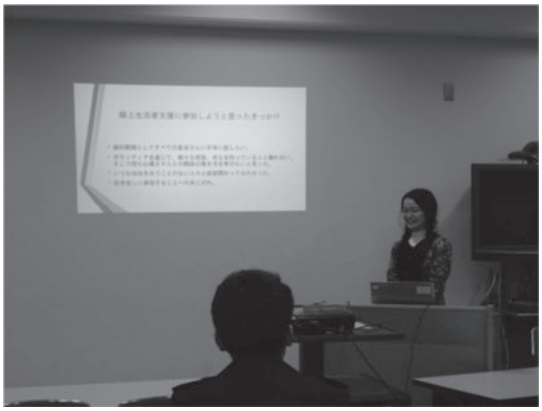


第４回体験報告会

実施日：2016 年 2 月 26 日（金）18：15～19：45　情報教育館４階共用多目的教室（2）

報告者	参加先	報告タイトル（エントリー順）
C．O	公益財団法人 札幌国際プラザ SAPPORO こども領事	「こども領事と学んだ三か月」
M. H	特定非営利活動法人　TENOHASI	「見えなかったのか？見ていなかったのか？」





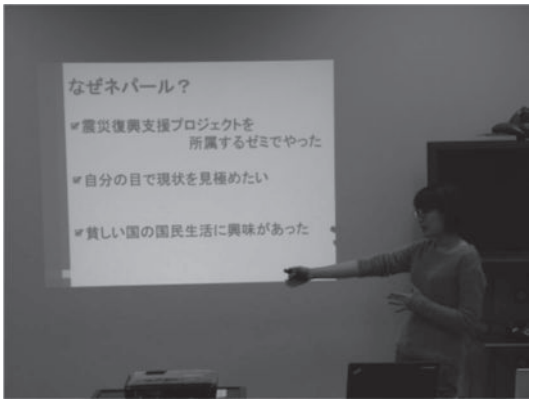


体験報告会の後、Hさんの自主企画として青山学院大学３年生の野中皓太さんを交えてボランティアについて議論しました。ボランティア活動に参加する人々との交流の濃淡によっては、ボランティアの参加する意欲が左右されるなど、ボランティア活動に対するモチベーションの維持の困難さについて話題を提供してくれました。ご参加ありがとうございました!

第 5 回体験報告会

実施日：2016 年 3 月 18 日（金）18：15～19：45　情報教育館４階共用多目的教室（2）

報告者	参加先	報告タイトル（エントリー順）
K. T	CEC　JAPAN　NETWORK ネパール震災復興支援ボランティア	冒険・学び



２．オリエンテーションの模様

オリエンテーションは、4 月 10 日と 4 月 24 日に２回行われました。2 回目のオリエンテーションでは、北海道大学国際本部特定専門職員の田村早紀さんによる国際本部におけるボランティア活動の紹介およびボランティアのニーズについてご講演いただきました。





オリエンテーションでは、昨年度（初年度）のボランティア履修生２名、N. I さん（写真左）、K.Mさん（写真右）が、今年度の受講生に向けて自身のボランティア体験談を語り、熱いエールを送りました。



N. I さん



K.Mさん

３． ふりかえり会の模様

第１回　ふりかえり会

１回目のふりかえり会（10/9）では、10/2 の体験報告会で報告をしたＯさん、Ｙさんを囲んで、各々のボランティア体験について困ったこと悩んだことなどを取り上げ、その困難をどう克服したかについて意見交換をし、ボランティアについての理解をさらに深めました。



10/9 のふりかえり会の様子

第２回　ふりかえり会

11 月 20 日（金）、北海道大学学生ボランティア活動相談室のサポーターであるＦ.Ｎさんをお招きし、相談室の活動内容とＮさんのボランティアとしてのキャリアとポリシーなどについてお話しいただきました。講演後の座談会では、ボランティア側の課題とボランティアを受入れる側の課題について議論が展開し、ボランティアを企画・運営することの難しさなどについ

て議論が発展していき、授業終了後も続きました。Ｎさん、最後までお付き合いくださりありがとうございました。

ゲスト	F.Nさん
テーマ	「子どもとかかわるボランティアでの体験談」
日時	１１月２０日（金）１８:１５～
場所	情報教育館４階　共用多目的室（２）



講演中のＮさん



Ｎさん（右から２番目）を囲んで座談会

第３回　ふりかえり会



1/22（金）の３回目のふりかえり会の模様

４． ワークショップの模様

ワークショップは、10 月 16 日、11 月 27 日、1 月 29 日の全３回行われました。このうち、11 月 27 日（金）のワークショップでは、北海道大学国際本部国際連携課国際協力マネージャーの榎本宏さんをお招きし、海外の大学のボランティア事情や海外の大学生活の安全性などをテーマに、様々なお話しをしてくださいました。講演後の質疑応答では、学生からの質問が次から次へと続きました。時間ギリギリまで学生たちの質問に懇切丁寧にお応えくださいましてありがとうございました。





５． まとめの講義





2016 年 1 月 29 日（金）、今年度の学期最終日に、木村純先生がワークショップとまとめの講義をしました。昨年度に引き続き今年度も、「ボランティアとは何か」という定義や、ボランティアという視角からみた個人と個人の接点と個人と社会の接点についてお話しいただきました。ボランティアとして働く個人が直面する困難やジレンマ、その解釈をめぐって様々な議論を紹介するなど、熱のこもった講義をありがとうございました。学生たちは、様々な社会人ボランティアやボランティアを必要とする人々との出会いをし、多様なボランティアの生き方

や考え方を知り、新しい自分との出会いや、これまで隠れていた自分との出会いをしてきました。学生たちは、ボランティアを通じて、自分自身と真剣に向き合ってきました。木村先生は、学生たちにボランティアを強制することなく、学生の主体性、自主性、責任感を尊重し、忍耐強くボランティア相談にのってくださいました。木村先生、退職おめでとうございます。一旦ここで、大変お疲れ様でした。そして、また来年度もよろしくお願いいたします。

６．その他

本科目の受講生が札幌ボランティアコーディネーター研究会での講演を依頼されました。

日時	2015 年 12 月 17 日(木) 18:30～　Ｊ．Ｋさん
題目	動物園ボランティアを体験して
場所	北海道大学高等教育推進機構　共用多目的教室（１）

日時	2016 年 1 月 21 日（木）18:30～　K．Ｆさん
題目	フランスの農場でのボランティア体験について
場所	北海道大学高等教育推進機構　共用多目的教室（１）

7．過去のニュースレター記事

ニュースレター　No.104　　January　2016（北海道大学高等教育推進機構）

新渡戸カレッジボランティア
―2015年度のこれまでの活動報告―

新渡戸カレッジボランティアは，２年目を迎えました。現在，15名の受講生が参加しています。４月にオリエンテーションを行い，昨年度の受講生の中から希望者２名に体験を話してもらいました（写真１，２）。概要説明後，国際本部特定専門職員の田村早紀さんから国際本部で行われている渡日時留学生サポーターやその他のボランティアについて説明がありました（写真３）。

本科目では，ボランティア活動を通じて学んだこと・交流することを目的として，年に３～４回体験報告会を開催しています。また今年度から，体験報告会での報告をふりかえり，さらに理解を深める目的で，ふりかえり会とワークショップも実施しています。体験報告会では，ボランティアに参加した学生たちが集まって，実習中または実習後にボランティア体験についてプレゼンテーションを行っています。そこではＡ４サイズ１～２枚程度の配付資料を準備し，一人10分程度の報告と質疑応答を行います。報告内容は，活動先，活動日時，活動内容と，ボランティア活動を体験しての感想（新しい発見や学び，感動するような経験や出会い，困難，改善点など），参加先や指導教員への要望や後輩に伝えたいことです。これまでに２回，体験報告会を実施し，履修参加者15名中，７名の学生が体験報告をしました。以下は，その内容と体験報告会の模様です。

第１回体験報告会は10月２日に行われました。この報告会では，３名が報告をしました。１名は，まちづくり，２名がそれぞれニュージーランド，ドイツで環境保護のボランティア体験を報告し，熱のこもったプレゼンテーションが行われました。２回目の体験報告会は，11月13日に北図書館２階セミナールームで行われました。この報告会では，４名の学生がプレゼンテーションをしました(写真４～７)。それぞれまちづくりボランティア，北海道開拓の村，円山動物園そして海外ボランティア（フランスで道路をつくる)に参加しました。またこの報告会では，報告者たちが参加した北海道開拓の村や円山動物園でボランティア活動をしている一般の人たちが３名参加し，報告者を応援してくれました。第２回体験報告会の模様は北図書館のホームページでもご覧いただけます。https://www.facebook.com/hokudailibrary/posts/1126999430645377/

（木村　純・川畑　智子）

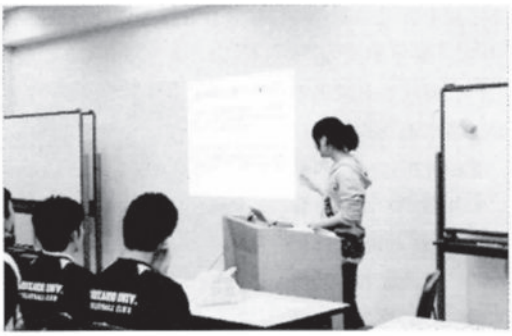


写真１　国内の活動



写真２　海外の活動



写真３　説明中の田村さん（国際本部）

表１　第１回体験報告会

実施日：平成27年10月２日（金）　18：15～19：45　　情報教育館４階共用多目的室(2)

報告タイトル
食でつなぐ地域と人
ニュージーランドの公園での自然保護活動
国際×環境保護　ボランティア@ドイツ

表２　第２回体験報告会

実施日：平成27年11月13日（金）　18：15～19：45　　北図書館２階セミナールーム

報告タイトル
北海道地域魅力－ボランティアを通じて知った過疎地域のこと
Workcamp à la ferme de la Bonzlgve （グジーグ農場でのワークキャンプ）
北海道の歴史と新たな気づき
円山動物園ガイドから学んだこと



写真４　神恵内村のまちづくり



写真５　フランスの農場



写真６　北海道開拓の村



写真７　円山動物園

（出典:北海道大学高等教育推進機構 2015『ニュースレター』No. 104 , January , p16 -17 ）

編集後記

2013年に新渡戸カレッジが開校し、2014年４月からボランティア科目が開講しました。ボランティアが科目として単位化されたのは、北海道大学史上初の出来事でした。開講に向けて、準備をしているとき、同じ高等教育研究部門内に生涯学習がご専門の木村純先生がいました。これぞ天の助けと思い、思い切って、木村先生にボランティア科目の責任者になっていただけませんかと声をかけました。木村先生は、当時も今も大変多忙な先生であることは重々承知していたので、そう簡単には承諾していただけないかもしれないと不安な気持ちでした。木村先生は、私が本学に採用されたときの面接委員の一人でしたので初対面ではありませんでしたが、木村先生と面と向かって話すのはその時以来だったと思います。

木村先生は、ちょっと緊張気味な私を快く研究室に迎えてくださり、私の相談に乗ってくれました。2013年４月に着任して間もない私は、新渡戸カレッジについて舌足らずな説明しかできませんでした。木村先生はそんな私を見て、ゆっくりと落ち着いて私の話を聞いてくださいました。私のわかりにくい説明を聞いてから、木村先生は、ボランティアの単位化について様々な意見があることを教えてくださいました。 例えば、ボランティアは自主性、主体性を前提とするものであり、単位を目的にボランティアをすること自体、その前提と矛盾してしまうのではないかという意見です。 私はこの話を聞いたとき、お引き受けいただくことは難しいのかもしれないと不安な面持ちになりました。しかし、話しているうちに、木村先生から「北海道大学にはまだボランティアが科目として存在したことがないし、もしもやるのであれば、ボランティア体験学習という位置づけであればやれないこともないし、ボランティア体験から学生がどのようなことを学習するのかについてや、ボランティアとは何かというボランティアの定義について学生が学ぶ機会があってもいいのではないか」と様々な意見が出てきました。木村先生は、ボランティアの単位化について異なる視点から前向きに評価してくださり、最後には、「他に誰も適任の方がいなければやってもいいよ」と言ってくださいました。

私は感謝の気持ちでいっぱいになりました。その後、しばらくして木村純先生の恩師である山田定市先生の葬儀があることを知り、参列もさせていただきました。棺に眠る山田定市先生とはそのときが最初で最後の出会いでした。数多くの子弟たちが全国から駆け付けて、長い行列を作り、一人ひとり最後に白いゆりの花を一本ずつ山田先生に手向けていったときのことが今も記憶に残っています。木村先生を含む、子弟からとても愛されていた人なのだと思いながら、私は手を合わせ、木村先生の恩師から脈々と続く生涯学習の研究が、そこで留まることがないように、今後も末永く続きますよう、可能な限り支援していくことを誓いました。

今年４月から３年目の開講となります。今後も木村先生と二人三脚で試行錯誤をしながら取り組んでいきたいと思います。みなさん、今後も新渡戸カレッジボランティアをよろしくお願い申し上げます。（川）

新渡戸カレッジ　ボランティア　2015 年度報告書

発行日	2016 年　4 月　初版　（冊子体）
発行者	北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部 科目責任者　木村純
編集	北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部 川畑智子
協力	北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部 北海道大学新渡戸カレッジオフィス